

伊那市手良地区県営は場整備事業

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

島崎遺跡

1990. 3

上伊那地方事務所
伊那市教育委員会

伊那市手良地区県営ほ場整備事業

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

島崎遺跡

1990. 3

上伊那地方事務所
伊那市教育委員会



鳥崎遺跡遠景



第10号住居址出土荒形広片口土器

序

この報告書は、平成元年度手良地区県営ほ場整備事業に伴う島崎遺跡緊急発掘調査の報告書であります。

手良地区においては、昭和52年度に中坪地区のほ場整備事業に着手しました。本地区での土地改良事業に伴う発掘調査では、砂場遺跡、上村遺跡、堤林遺跡、堂垣外遺跡等と数多くの遺跡の調査を実施してきました。今回、平成元年11月より約1ヶ月にわたって島崎遺跡の発掘調査を実施しました。

埋蔵文化財の保護につきましては、現状での保存がいちばん望ましい方法なのですが、土地改良事業・開発事業等との関係があり、大変むずかしい問題となってきております。私たちは発掘調査結果を記録保存という形で残し、先人が遺した貴重な人類の足跡を後世に伝えていかなければなりません。

島崎遺跡においては、縄文中期の住居址が13軒、土壙が16基検出されました。出土遺物も縄文中期後葉の土器を中心として石器等数多く出土し、縄文時代の生活の一部をかいま見ることができました。

今回の発掘調査におきましては、長野県教育委員会文化課ならびに上伊那地方事務所土地改良課職員の方々のご指導をいただき、発掘調査団長の友野良一先生をはじめ調査員の先生方、地元の方々の積極的なご協力と作業員のみなさんのご努力により、ここに無事報告書を刊行するはこびとなりました。また、ご助言・ご指導くださいました井戸尻考古館、釈迦堂遺跡博物館、山梨県立考古博物館の先生方に心より感謝申し上げるとともに、この報告書が今後教育文化の向上に活用されることを願っております。

平成2年 3月

伊那市教育委員会

教育長 宮下 安人

例　　言

1. 本書は、平成元年度に実施された伊那市手良地区県営ほ場整備事業に伴う、緊急発掘調査の報告書である。
2. この緊急発掘調査は、上伊那地方事務所の委託により伊那市教育委員会が発掘調査団を編成し、発掘調査団に事業を委託して実施した。
3. 本報告書は、平成元年度中にまとめることが要求されているため、調査によって発見された造構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、資料の再検討は後日にゆすることにした。
4. 本報告書の執筆者及び図版製作者は次のとおりである。
 - 本文執筆者　友野良一・小木曾清・早川宏
 - 図版製作者　小木曾清・友野良一・池上大二・建石紀美子・早川宏
 - 土器復元　小木曾清・池上大二
 - 写真撮影　友野良一・小木曾清・早川宏
5. 本報告書の編集は、主として伊那市教育委員会がおこなった。
6. 出土遺物及び実測図類は、伊那市考古学資料館に保管してある。

目 次

口 紙

序

例 言

目 次

挿図目次

表目次

図版目次

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至るまでの経過	1
第 2 節 調査会の組織	1
第 3 節 発掘調査の経過	2

第 II 章 遺跡の環境

第 1 節 遺跡の位置	4
第 2 節 地形及び周辺の遺跡分布	5
第 3 節 手良地区の地質	6
第 4 節 歴史的環境	8

第 III 章 遺構と遺物

第 1 節 調査の概要	15
第 2 節 遺構と遺物	15

ま と め	51
-------------	----

あとがき	52
------------	----

参考文献	52
------------	----

図 版	53
-----------	----

挿 図 目 次

第1図	島崎遺跡の位置図	4
第2図	周辺の地形及び遺跡分布図	5
第3図	手良地区地質概界図	6
第4図	六道原地質柱状図	6
第5図	島崎遺跡地質柱状図	6
第6図	島崎遺跡周辺小字名図	9
第7図	島崎遺跡遺構配置図	11
第8図	島崎遺跡A地区実測図	13
第9図	第10・11号住居址実測図	17
第10図	第1号住居址実測図	19
第11図	第2号住居址実測図	20
第12図	第3号住居址実測図	21
第13図	第4号住居址実測図	22
第14図	第5号住居址実測図	23
第15図	第6号住居址実測図	25
第16図	第7号住居址実測図	26
第17図	第8号住居址実測図	27
第18図	第9号住居址実測図	28
第19図	第12号住居址実測図	29
第20図	第13号住居址実測図	30
第21図	土塁実測図	31
第22図	B地区トレンチ実測図	33
第23図	第11号住居址出土土器拓影及び石器実測図	35
第24図	第10号住居址出土土器拓影及び実測図	35
第25図	第10号住居址出土土器拓影及び実測図	36
第26図	第10号住居址出土土器拓影及び実測図	37
第27図	第10号住居址出土土器及び石器実測図	38
第28図	第1号住居址出土土器拓影及び石器実測図	39
第29図	第2号住居址出土土器拓影及び石器実測図	40
第30図	第3号住居址出土土器拓影及び石器実測図	41
第31図	第4号住居址出土土器拓影及び石器実測図	42
第32図	第5号住居址出土土器拓影実測図	43
第33図	第5号住居址出土土器及び石器実測図	44

第34図	第6号住居址出土土器拓影実測図	45
第35図	第6号住居址出土土器及び石器実測図	46
第36図	第7号住居址出土土器拓影実測図	47
第37図	第7号住居址出土土器拓影実測図	48
第38図	第8号住居址出土土器拓影及び実測図	48
第39図	第9号住居址出土土器拓影及び石器実測図	49
第40図	第12号住居址出土土器拓影及び実測図	50
第41図	土塙出土土器拓影及び実測図	50
第42図	B地区トレンチ出土土器拓影及び実測図	50

表 目 次

第1表	土塙一覧表	30
第2表	竪穴一覧表	32

図 版 目 次

図版1	遺跡近景	55
図版2	遺跡遠望、歴史的環境	56
図版3	歴史的環境	57
図版4	歴史的環境	58
図版5	歴史的環境	59
図版6	第1号・第2号住居址	60
図版7	第3号・第4号住居址	61
図版8	第5号・第6号住居址	62
図版9	第7号・第8号住居址	63
図版10	第9号・第10号住居址	64
図版11	第11号・第12号住居址	65
図版12	第13号住居址、第5号住居址出土石器	66
図版13	第1~8号土塙	67
図版14	第9~16号土塙	68
図版15	第1~7号竪穴	69
図版16	住居址遺物出土状況	70
図版17	住居址遺物出土状況	71
図版18	第10号住居址遺物出土状況	72

図版19	第1号～第3号住居址出土土器	73
図版20	第4号・第5号住居址出土土器	74
図版21	第5号～第7号住居址出土土器	75
図版22	第7号・第8号・第11号住居址出土土器	76
図版23	第10号住居址出土土器	77
図版24	第10号住居址出土土器	78
図版25	第10号住居址出土土器	79
図版26	第10号住居址出土土器	80
図版27	B地区トレンチ・土塹出土遺物	81
図版28	住居址出土土器	82
図版29	第10号住居址出土石器	83
図版30	発掘スナップ	84

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

- 昭和63年9月 県営は場整備事業（手良地区）に係る島崎遺跡の保護について、長野県教育委員会と上伊那地方事務所とで協議を行なう。
- 昭和63年12月 島崎遺跡発掘調査を昭和64年度文化財関係国庫補助事業とするため事業計画を長野県教育委員会へ提出。
- 平成元年5月 島崎遺跡発掘調査の平成元年度文化財関係国庫補助事業計画として内定通知を受け、補助金交付申請書を提出。
- 平成元年9月 埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁へ提出。
- 平成元年11月 上伊那地方事務所長と伊那市長との間で、調査委託業務の契約を締結。
伊那市教育委員会では、島崎遺跡発掘調査団を編成し業務を遂行することになった。

第2節 調査会の組織

○伊那市教育委員会

委員長 下平繁
委員長代理 金原信郎
委員 赤羽芳雄
〃 中村伸員
教育長 宮下安人
教育次長 三沢貞一
事務局 矢沢巧（社会教育課長）
林俊宏（社会教育係長）
清水重良（青少年教育係長）
浦野節子（社会教育係）
早川宏（社会教育係）

○島崎遺跡発掘調査団

団長 友野良一（日本考古学协会会员）
調査員 小木曾清（宮田村）

第3節 発掘調査の経過

月・日	日 誌
11. 20	発掘器材を伊那市考古学資料館より現場へ搬入。テントを設営した。午前10時より現場において、調査団と上伊那地方事務所土地改良課及び伊那市教育委員会社会教育課と打ち合わせ会議をする。
. 21	B地区において耕土の除去作業。耕作道設置予定区域内において両端に幅2mのトレンチを入れる。北端のトレンチを第1トレンチ、南端を第2トレンチとする。
. 22	第1・第2トレンチ掘り下げ。第1トレンチよりピット、土器片検出。
. 24	第1トレンチの実測をする。第2トレンチより土器片出土。
. 25	第1トレンチの実測及び写真撮影。A地区において耕土除去を開始する。
. 27	第2トレンチの実測及び写真撮影。A地区G-14~16、H-14~16グリッドにおいて掘り下げ、住居址5軒検出。
. 28	A地区掘り下げ。雨のため午前中で本日の作業を終了する。
. 29	B地区において第1・2トレンチの間に第3トレンチを入れるが遺構及び出土物は検出されなかった。
. 30	1号住居址実測。2号住居址の掘り下げをする。
12. 1	3・4号住居址の掘り下げを開始する。
12. 2	2号住居址完掘。
. 4	2・3号住居址の実測。写真撮影をする。
. 5	5号住居址掘り下げ。住居址の北隅より埋ガメが出土。
. 6	6・7号住居址掘り下げ。H-12、G-12グリッド付近の耕土除去を行なう。住居址と土壤を検出。住居址から数多くの土器片出土。10・11号住居址とする。
. 7	8・9号住居址の掘り下げ。8号住居址西F-16グリッドに12号住居址を検出。
. 8	6号住居址実測。G-17グリッドより土壤を検出する。
. 9	B地区第3トレンチにおいて、地質調査坑を設定する。断面実測。写真撮影後埋め戻し作業をする。
. 11	10・11号住居址の掘り下げをはじめる。
. 12	5号住居址実測。土壤断面実測。
. 13	7・8号住居址の実測をする。
. 14	雨のため、テント内の整理と道具の整備を行なう。テント内で遺物の水洗いをする。
. 15	9号住居址・12号住居址の実測をする。
. 16	土壤の掘り下げをはじめる。午後遺跡説明会。友野団長が説明を行なう。参加者30余名。
. 17	土壤の掘り下げと実測をする。午後遺跡説明会をする。友野団長が説明を行ない

	50名程の参加者があった。10号住居址の実測をする。
. 18	埋甕の取りあげを行なう。6号住居址埋甕には、隣接してもう一個の埋甕を検出した。
. 20	5号住居址の埋甕を取り上げる。
. 21	A地区の全体実測をする。
. 22	A地区の実測及び写真撮影をする。
. 25	テント及び発掘器材のあとかたづけをし、現場での作業を終了する。
12. 26	出土遺物の整理。
1. 5	報告書作成のため整理作業を始める。
3.	報告書作成の作業完了。

長い期間にわたった発掘調査に深いご理解とご協力をいただいた地元の関係の皆様、発掘調査に直接ご参加下さいました方々に心より感謝を申し上げる次第であります。

発掘調査に参加された方々（順不同）

伊藤 勝、伊藤菊次、蟹沢治江、小松栄子、上島正延、大久保富美子、酒井とし子、柴佐一郎、池上大二、城倉すみ子、井上 昌、竹村直人、高橋雅義、小田切守正、城倉直子、有賀藤雄、建石紀美子

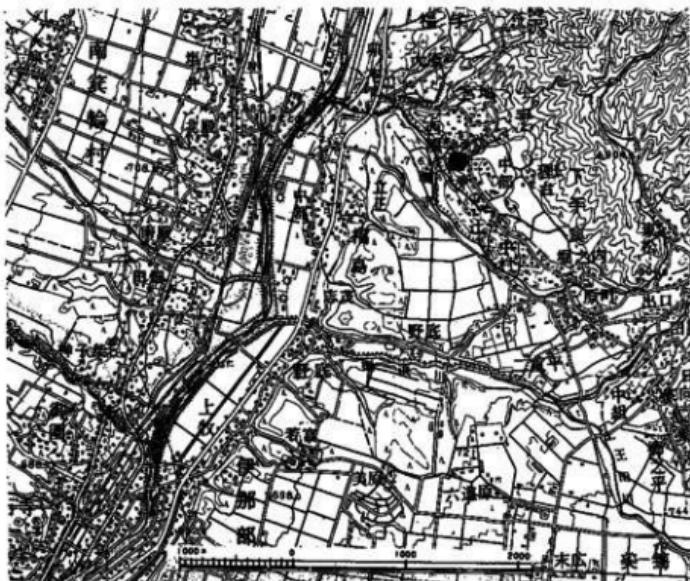
第II章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置

島崎遺跡は、長野県伊那市手良沢岡八ツ手地籍にある。遺跡に至るには、JR線伊那北駅より天竜川を渡り、主要地方道伊那辰野線（通称辰東線）を辰野方面へ約6km進み、卯の木交差点を右折して県道美鷹箕輪線に入る。この道を東に向かい約500m進むと右手側に八ツ手公民館を見ることができる。遺跡は公民館西側の台地に分布する。

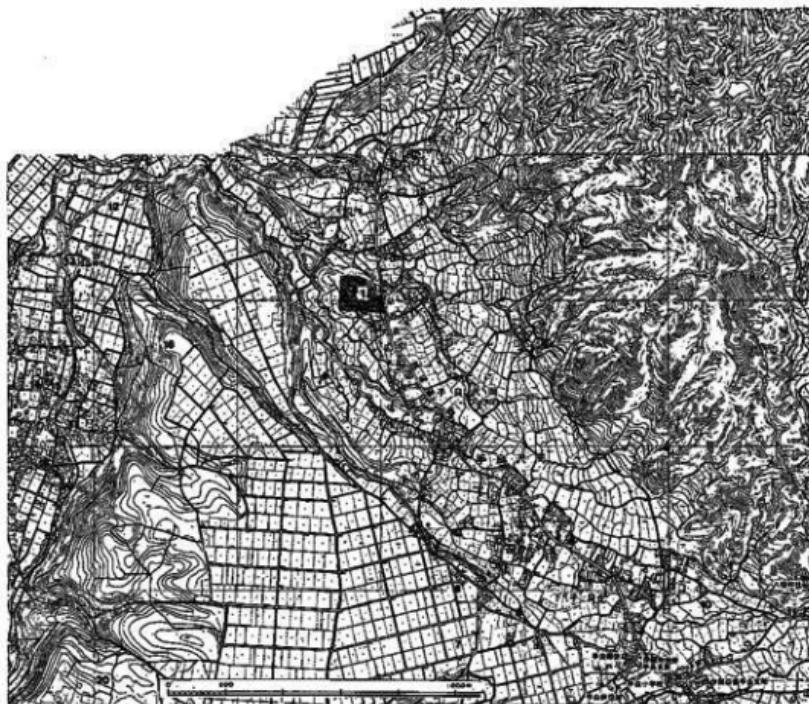
手良地区は伊那市の東部に位置し、東に連なる山は高速町と接し、北は箕輪町と接している。本遺跡の周辺には、塊林遺跡（縄文中期・中世）、山の田遺跡（平安）、城遺跡（中世・近世）などの遺跡の存在が確認されている。

本遺跡は、北に八手川が、南に沢岡川が流れているその間にはさまれた舌状の台地に位置している。



第1図 島崎遺跡の位置図

第2節 地形及び周辺の遺跡分布



第2図 島崎遺跡周辺の地形及び遺跡分布図

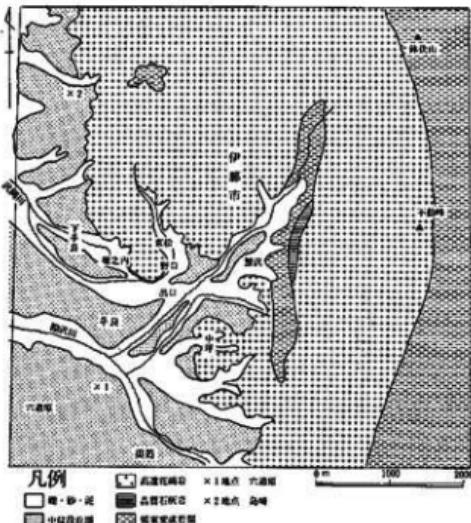
1. 地 形

遺跡の位置する手良地域は、東に鉢伏山（1456m）・不動峰（1374m）などが連なり、その西に八ツ手の山々が部にせまっている。この八ツ手部落は東西の方向から三峰川によって形成された台地で、沢岡川や瀬沢川・八手川によって再浸食されてできた複雑な段丘地形をつくっている地域である。

2. 周辺の遺跡分布

- | | | | |
|--------|----------|-----------|-----------|
| 1. 島崎 | 6. 堀外 | 11. 古八幡 | 16. 池火平 |
| 2. 堤林 | 7. 松太郎窪 | 12. 南原 | 17. 福島上平2 |
| 3. 山の田 | 8. 角城 | 13. 大上平 | 18. 福島上平4 |
| 4. 中原 | 9. 南堀外 | 14. 福島上平3 | 19. 福島古墳群 |
| 5. 辻西幡 | 10. 鐵治堀外 | 15. 福島上平1 | 20. 原 |

第3節 手良地区の地質



第3図 手良地区地質概界図



第4図 六道原地質柱状図 (第3図 X-1地点)

柱状図	井戸名	サンプル No.	高さ (m)	岩相	その他の
0-100m	黒色土 (黒土)	100	0-10m	hy - mu	qd-E -
100-150m	黒褐色土 (黒土)	101	0-10m	hy - mu	qd-E -
150-200m	黒褐色土 (黒土)	102	0-10m	hy - mu	qd-E -
200-250m	砂岩 (リナフラ)	103	0-10m	hy - mu	qd-E -
250-300m	砂岩 (リナフラ)	104	0-10m	hy - mu	qd-E -
300-350m	砂岩 (リナフラ)	105	0-10m	hy - mu	qd-E -
350-400m	砂岩 (リナフラ)	106	0-10m	hy - mu	qd-E -
400-450m	砂岩 (リナフラ)	107	0-10m	hy - mu	qd-E -
450-500m	砂岩 (リナフラ)	108	0-10m	hy - mu	qd-E -
500-550m	砂岩 (リナフラ)	109	0-10m	hy - mu	qd-E -
550-600m	砂岩 (リナフラ)	110	0-10m	hy - mu	qd-E -
600-650m	砂岩 (リナフラ)	111	0-10m	hy - mu	qd-E -
650-700m	砂岩 (リナフラ)	112	0-10m	hy - mu	qd-E -

凡例

(柱状図) ■ 黒土・黒褐色土 ■ 石泥りテフラ ■ 砂
 (岩相) hy : しそ輝石, bi : 黒雲母, mu : 白雲母, mg : 雜鉄鉱, qz : 石英, fl : 長石などの鉱物が含まれている。
 (大山ガラス) bw : バブル型火山ガラス, Pm : 軽石型火山ガラス, 火山ガラス含有量 ● 10%以上 ○ 10%以下

第5図 島崎遺跡地質柱状図

1. 手良地域周辺の地質

手良地域は、六道原扇状地の三峰川麓部に位置する。東部の山地は領家變成岩帯の高遠花崗岩よりなり、不動峰と鉢伏山を結ぶ伊那市と高遠町の分水嶺から高遠寄りは、領家變成岩である。また、この变成岩類は蟹沢の東方にも高遠花崗岩にかこまれて南北に細長く分布している。この地域に分布している領家變成岩類は、古生代及び中世代に海底に堆積した砂や泥を主とする堆積物が、広域变成作用を受けて雲母片岩や黒雲母片麻岩に変化したものである。また、これらの变成岩は、中世代末から新生代古第三紀にかけて貫入した高遠花崗岩によって接触变成作用を受け、花崗岩の周辺部では黄青石ホルンフェルスなどを含む接触变成帯を形成している。

2. 手良地域の段丘

この地域は三峰川によって形成された六道原扇状地と、棚沢川などの小河川によって形成された扇状地の接点にあり、更にその扇状地を棚沢川や沢岡川が再浸食して複雑な段丘地形をつくっている。

1987年に第3図の×1地点で大春化学㈱により白土採掘のための穴が掘られた。この側壁の観察結果を柱状図に表したもののが第4図である。この地点では、六道原扇状地の礫層の上に約8万年前に降下し堆積した御岳軽石層のPm-1が乗り、更にその上位にはそれ以後に降下した軽石や火山灰を乗せている。したがって、この面が形成され段丘化した年代はPm-1の軽石が降下した8万年前よりも以前のおよそ10万年前頃である。第3図の中位段丘面とした面はおそらくこの時代か、或はやや後に離水して段丘化したものと思われる。

3. 島崎遺跡の地質

手良地区地質概要図×2地点での地質調査坑の観察結果によれば、この面上では軽石や火山灰の層ではなく、礫層の上に厚さ2mの砂混じりテフラ層が堆積している。構成する礫の種類は砂岩や粘板岩・緑色岩を主とする5~20cmの亜円礫で、風化がかなり進んでいる。これらの礫は東方の山地に分布する領家帯の岩石ではなく、中央構造線よりもさらに東側の三峰川帯や秩父帯、四十萬帯から運ばれてきたものであり三峰川の扇状地礫層と考えられる。つまり、この付近まで時には三峰川が流れて扇状地礫層を堆積し、その上に8万年前に降下した御岳軽石を乗せていたが、島崎遺跡のB地区（氾濫源）とA地区の（六道原段丘）面が混在する地形である。その中で地質調査地点がB地区（氾濫源）のみであったが、分析結果から考えると六道原面も合わせて調査すべきであったが、調査期間等の制約もあり実施できなかった。後日調査してみたい。

この柱状図で見ると、砂層を構成する砂粒は黒雲母や白雲母・石英・長石の他に磁鐵鉱、しそ輝石などが混じる。これらの鉱物は火山起源のものでなく、東方山地の領家帯の岩石を含んだ鉱物であり、主として沢岡川の上流の東松方面から流水によって運ばれて堆積したものと考えられる。砂層の上部から下部にかけて姶良Tn火山灰（九州鹿児島湾の姶良カルデラから約

25,000年前に飛来した火山灰（略称A T）の火山ガラスと形態が同じ火山ガラスがわずかではあるが含まれている。おそらく二次的に移動してきて混じったものと考えられる。

第4節 歴史的環境

手良地区は伊那市の東部地区に含まれ、天竜川左岸地域にあたっている。この地域は天竜川による河岸段丘と、天竜川の支流である棚沢川や三峰川によって形成された段丘面に東側の山地より流出した土砂による扇状地が存在している。この扇状地の上部に更に厚いテフラが覆っている地帯である。このような地理的な背景を土台として八ツ手区の歴史は展開しているのである。

八ツ手の縄文時代は、山の田遺跡の早期の押型文土器（約8000年前）が最古であり、早期末の茅山式系の条痕文土器が出土している。中期初頭では梨久保式土器が出土している。中期中葉では井戸尻式に比定される土器や中期後葉の土器が出土している。その他本遺跡からは弥生時代前末期の水神平式土器が出土した。このことは、伊那谷に弥生文化が入ってきた時期としてはかなり早い時期に、ここ八ツ手の地にも定着したこと物語っている。

次に古墳時代であるが、現在部落内に墳丘は認められない。しかし、瀬沢川の南には六ツ塚があり、この六ツ塚は六世紀代の古墳とされていることから八ツ手にもこの時期の村が存在したことが予想されることもない。

平安時代になると、山の田遺跡から土師器や須恵器、灰釉陶器が出土しているので、島崎遺跡周辺にも平安時代の村があったことが予想される。

中世期については、昭和61年に発掘調査された八ツ手川北側の島崎遺跡から、中津川の窯で焼かれた13世紀の大平鉢や同時期の白磁の碗（中国原産）が出土している。このことから、平安時代の生活の母体があったところへ中世の早い時期に村が成立したと考えられる。

15世紀では、瀬戸灰釉大盤・中国明産の青磁碗など、16世紀においては、古瀬戸灰釉丸皿大窯II期・古瀬戸鉛釉甕などが出土している。17世紀では瀬戸鉄釉摺鉢・志野長石釉皿など・18世紀では瀬戸灰釉細筒形三足香炉・瀬戸御深井釉茶碗など近世陶器が出土したことにより近世の村の存在を認めることができた。

今回の調査で思いかけない収穫は、八ツ手地区に塚が発見されたことである。塚の調査にあたっては、地元の登内祖一、登内三郎氏に案内してもらい調査を行なった。塚は八ツ手畠という小字の畠地西側の山林に所在している。塚は20a程の面積のところに7基の塚があり、塚の形態は円形塚と2個の双子塚から形成されている。その規模は、長径4~5m、高さ0.8~1.2mを測る。双子塚は長径7.0~7.8m、高さ約1.0mと小規模の塚である。この塚について地元ではあまりはっきりした言い伝えはない。八ツ手の塚は他の古墳に比べて小規模であることと、小規模の双子塚は上伊那地方では初見であることから、これらの塚の研究が今後望まれるところである。また、塚の付近には江戸時代の無縫塔4基と五輪塔1基が草むらにひっそりと建っている。



第6図 島崎遺跡周辺小字名図

今回発掘調査された遺跡周辺は通称で「島崎」と呼ばれているが、小字名からみると、A地区は「社官司」、B地区は「古城」という小字になっている。本遺跡は、八手川と瀬沢川にはさまれた舌状大地に存在していて、遺跡をとりかこむように、「コザワ」、「瀬沢」、「沢の田」、「宮ノ沢」、「下ノ沢」、「北ノ沢」という「沢」のついた小字名をみることができる。「島崎」という小字名は2つの川にはさまれた大地の先端にあり、まさに「島崎」(島先)となるところである。

県道美篠箕輪線より東側には、「田」のつく小字名が多く存在している。遺跡周辺から、「沢ノ田」、「打田」、「沼田」、「カラシ田」、「堤田」、「シモ田」などである。これは、現在でもこの辺一帯は湿田地帯が広がっていることからして、以前より水田が営まれ「田」のつく地名が生じたと思われる。

また、「妙堂」、「小御堂」、「堂板」、「仏供免」、「アッコメ」等、信仰に関する小字がみられる様に、付近には八幡宮、薬師堂、松尾神社、真宗寺などがある。

以下付近の地名についてまとめてみたい。

「前田」 前……目、顔、からだの向いている方。まえ。

田……稻や麦などを植える耕地。たんば。

この「前田」は、八幡宮もしくは薬師堂の前の田んばという意味が考えられる。

「堂板」 付近に御堂があったところの坂道かと思われる。

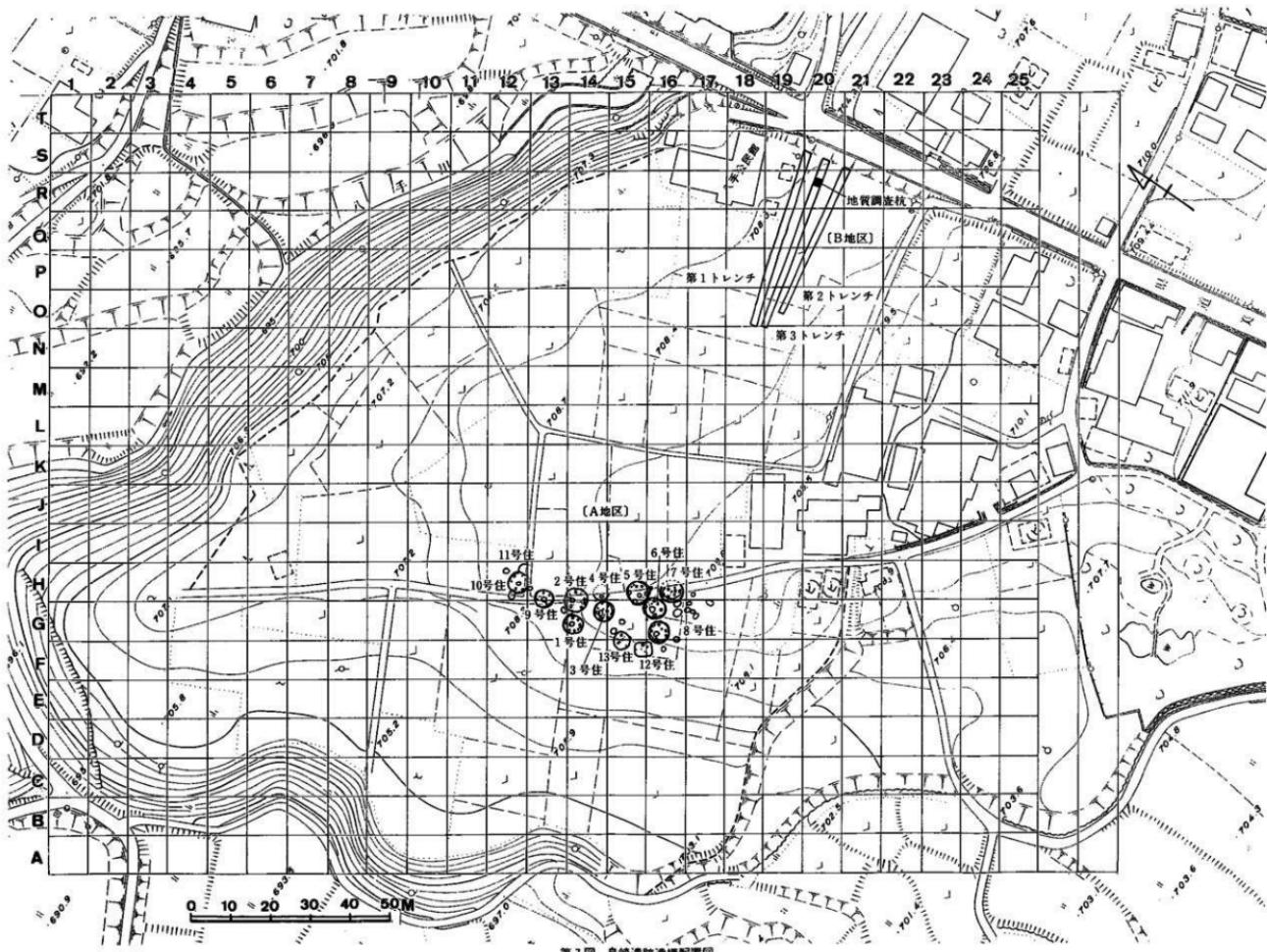
「金山」 鎌冶に関する地名。関連して「金山切原」がある。

「八ッ手」 八……やつ。やつ。

手……て。手の指。

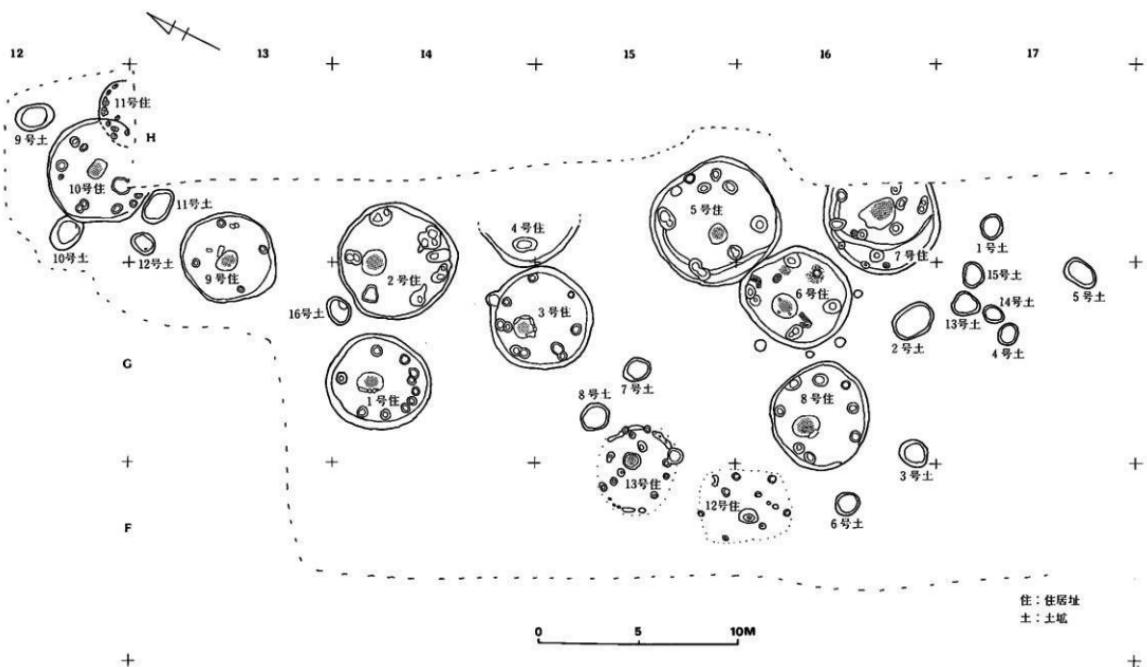
地元においては伝承、由来はあまり伝わっていないようと思われる。地形的には、手良地区の北端となり、箕輪町卯の木と接している。北西に傾斜した天竜川左岸段丘上に位置し、東と北に山が連なる。

広辞苑によれば、「八つの手があること。」「八ッ手網の略。」「ウコギ科の常緑灌木。暖地に自生し、高さ2m、葉は大形で質厚く、掌状に七~八中裂し、葉柄は長い。晩秋の頃茎上に花茎を出し、黄白色の五弁の小花を球状につける。果実は球状の液果で、翌年の初夏に熟し、紫黒色となる。庭木として葉は裾病葉として有効。」「テングノウチワ」となっている。



第7図 島崎遺跡遺構配置図





第8図 島崎遺跡A地区実測図

第III章 遺構と遺物

第1節 調査の概要

島崎遺跡は、畑地・原野・山林になっている地域にある。このため水田地帯とは異なり、遺物の散布状況を詳細につかめることができたので、土地区画整備計画に対応する保存処置ができたと思っているところである。

本調査は、遺跡範囲確認のおりの分布調査で土器が集中して表面採集された地点を中心として、調査範囲を便宜上A地区とし、八ツ手公民館南側における県道美鷗箕輪線からの耕作道取り付け予定地範囲をB地区と区分して調査が行なわれた。

本調査の対象となったのは場整備事業の範囲内の地目はすべて畑地である。遺跡の範囲は、東西約200m、南北約150m程の面積に広がると考えられ、今回調査されたA地区はそのほぼ中心部にあたるといえる。

畑地の耕土は耕作によりかく乱されていることから重機によって耕土の除土を行ない、A地区においては10m×10m毎の調査グリッドを設定し、B地区においては幅2m、長さ40mのトレンチを設定して調査が行なわれた。

調査の結果、A地区においては縄文中期前葉の住居址2軒、縄文中期後葉の住居址11軒、縄文中期後葉の土塙16基が検出された。B地区においては縄文中期後葉の堅穴7基を確認することができた。

第2節 遺構と遺物

土器について

島崎遺跡の発掘調査が、農作物収穫の都合上11月から12月下旬まで行なわれることとなり、時間的制約もあることから土器の分類は長野県史考古資料編の分類によることとした。本遺跡出土の土器は縄文中期前葉～後葉の土器が主体があるので、ここでは長野県史分類の区分とした。

中期後葉Ⅰ期 中期中葉の猪沢～井戸尻式土器に共通して継承されてきた装飾方法が変化する時期である。この段階では器面を横位に分割し、多段化した小区画を統合させ全体を形づくるのが基本であったのが、この時期には胴部文様帶を広くしたり、各文様をつなぐ隆線装飾を強調したり、あるいは区画文や区画内の充填手法を単純化することによって胴部装飾の大きな動きや各文様のつながりを重視した新たなスタイルを確立させたのである。

南信地方では、隆線装飾した後にその間を沈線で埋めていく手法が主体となる。器形はキャリバー形と円筒形の深鉢を基本とする。文様帶は中期中葉同様に横位多段化するものであるが、

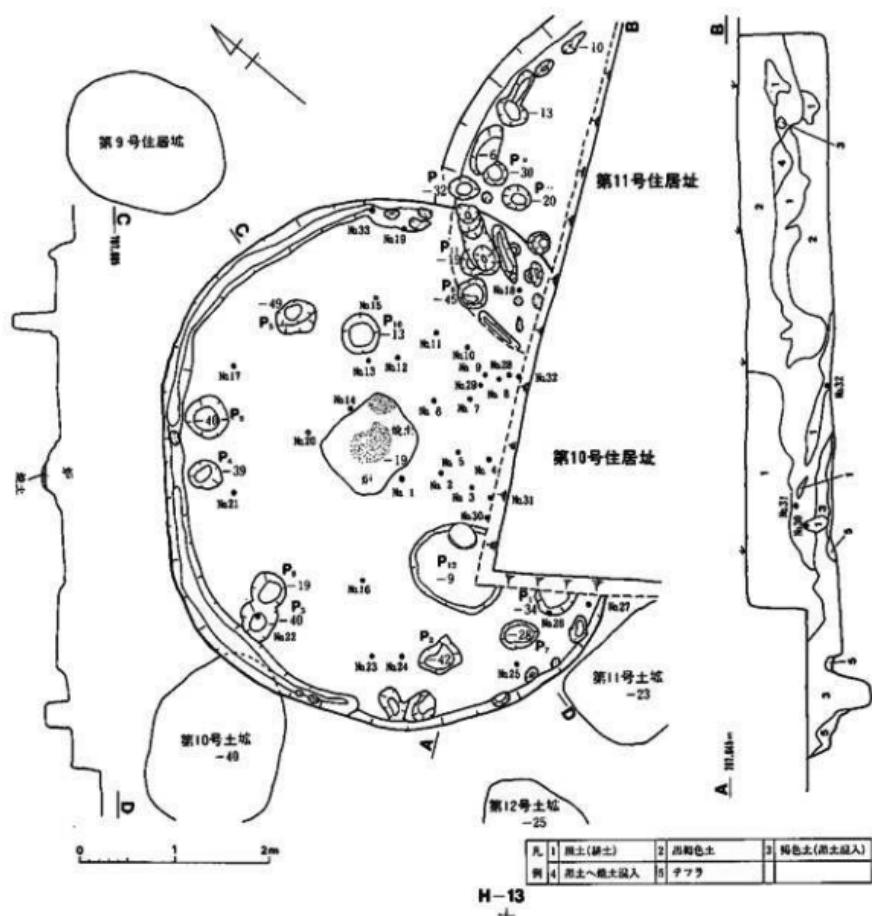
区画文は非常に少なくなる。文様帶の充填手法は隆線を交差させて貼付する籠目文や弧状文を連続させる重弧文や沈線文によって埋めるものに集約される。各文様帶をつらぬく隆線装飾や隆線を二分する角押文も梨久保B式の特徴である。また、南信地方の中期中葉椿形文土器との違いは、口縁部文様帶と胴部文様帶を連結する縱位隆線の定着や、口縁部文様帶の解体や変形である。曾利I式にくらべ前時期の特徴を残す土器である。この時期には平縁が多いのに対し波状口縁となるものもある。

中期後葉II期 この時期になると次のような変化をする。1. 椿形が安定されてくる。2. I期に行なわれた隆線による充填法が減少し、椿形文が清算され中期後葉の装飾方法が確立する。3. 関東・東海方面などの装飾が流入するようになる。4. 県内各地に特色ある土器ができるようになる。

上伊那地方では椿形・唐草文・腕骨文などの文様が発達する。いわゆる唐草文系土器群がそれにあたる。口縁部や頸部に区画文帯をもつことや把手をもつことも発達する。各文様は2本の隆線を平行に描くのが中心となる。隆線による充填法である籠目文や重弧文は姿を消していく。また、加曾利E式土器の地文に繩文が急増する。その他下伊那、上伊那南部にかけて東海地方の咲烟式土器の影響が顕著になる。

中期後葉III期 この時期になると棒状工具による縱位の沈線文を地文としている曾利系土器の手法が姿を消し、唐草文系の系譜に連なる土器群によって占められる。前時期の椿形土器とキャリバー形土器は存続するが頸部のくびれが弱くなる。文様は椿形にあっては口縁部文様が消失して、口唇部から若干無文帯を残して胴部文様帯が器面を占有する。キャリバー形では口縁部文様帯のなかの区画が円形状となり、隣接区画の連続性がうすれてくる。地文は「ハ」の字状文や矢羽状文を器面や区画内に充填させ、区画内を、縱走および斜走する結節繩文をつけた土器があらわれてくる。東海系の咲烟式土器がII期から引き続いて残る。

中期後葉IV期 この時期は文様などの手法に省力化がされてくる時期である。口縁部文葉帯は退化し、前時期までの胴部文様帯が発達する。区画は逆「U」字文などが盛んとなり、隆線文にかわって沈線文によって表出されることが多い。その区画内を「ハ」の字状文や矢羽状文で埋め、それが次第に粗雑になっていく。繩文や磨消繩文も多くみられる。III期までみられた蛇行懸垂文は減少傾向にあり、やがて消失する。器形では、唐草文系土器群の中で代表的だった椿形の大きなものは衰退し、大柄の渦巻文もみられなくなる。III期以来継続されるキャリバー形もくびれが弱くなり、ゆるやかな曲線となる。また、双耳壺風に2個1対の耳がつく浅鉢がめだつようになる。(友野)



第9図 第10・11号住居址遺物実測図

第11号住居址（第9図・第23図、図版22図）

構造

本址は、当遺跡の最も北側のH-12グリットからH-13グリットにまたがり農道下約80cmに発見され、10号住居址に一部複合部分を切られ、テフラを掘り込んで構築された、ほぼ円形を呈すると思われる竪穴住居址であると推定されるが、発掘用地外に遺構が及んでいる為、全様を知る事が出来ず、只数片の土器及び石器が検出されたのみである。壁高は、21~23cmで、周構は認められず、壁際に約6cm~23cmの小穴が連続して検出された。床面は良好なタキで平らであり、10号住の床面より5cm程下がっているのが認められた。Pイ、Pロ、Pハは柱穴であると思われるが、未解決の点は、次期発掘調査の日まで待つことにした。

遺物 1、2、4～6は、縄文地文で焼成良好。多量の金雲母を含む。1は、口縁上部に刻目を施し、下部を磨消し、頭部に沈線文様を施す。2は、平行沈線。4は、沈線及び刺突文。5は、結節縄文。1、5、6は、五領ヶ台に類例を見る中期初頭に考えられ、3の半截竹管による平行沈線は、梨久保遺跡に類例を見ることで本址の時代決定は、中期初頭Ⅰ期に比定されると思われる。7は、無文の底部。8は、砂岩の粗製石匙。

(小木曾)

第10号住居址（第9図、第24～27図、図版23～26・29）

遺跡 本址は、11号住居址を切って、テフラに掘り込んで構築された竪穴住居址である。規模は、未発掘部分があり推定するに南北約5.5m、東西約5mを測る、やや楕円形を呈する。主軸の方位は、N E 14°を示す。主柱穴は7個と思われるが、検出されたものは、P. 1～P. 6で、P. 7～P. 11は、立替時のものと考えられる。P. 12は、浅く、底は圓いタキで平らである。周構は壁に沿って北西側と検出され、深さは10～6cmで、处处10cm前後の小穴が検出された。床面は、ほぼ平らであるが、モグラ等に荒されたが東側は良好で、11号住との複合部分は埋土されている。炉は、浅く、附近に炉石が全く検出されない事から地床炉とも考えられる。

遺物 本址の出土した土器群の主体をなすものは、縄文中期中葉末から中期後葉Ⅰ期に移行する時期で井戸尻III及び井戸尻系の影響を受け、中期後葉Ⅰ期即ち曾利I式に平行される伊那独自のものを産出したと思われる。セットで出土した土器は、大形土器6、中形土器17、ザル形広口片口土器1、浅鉢2、土偶1である。1～11は、大形土器、1は、有孔鉢付土器で縄文地文に磨消によるU及びOの紋様を施し、頭部に鉗状の突起、鉗元に等間隔で小穴を内に傾斜し貫通。糸迦堂遺跡に類例を見、藤内式の影響を受けたものとされる。2、3は、同種のもので口縁に隆線の半円弧文を連続施し、区画内を沈線で埋める。4は、隆起線文区画を沈線で埋め菱形文等を施す。5～8は、同一固体と思われ、人面、十字文等が施され、8は、その底部と考えられる。9～10は、大形の浅鉢で口縁には浮形の人面の松毛、他は、抽象的文様が施されるもので、これらの2～10は、井戸尻IIIに類例を見る中期中葉VI期に比定される。11は、隆線と渦巻を施し、地文に沈線文様を施す曾利I式。12は、隆起線文区画に刺突文を施す。13～20は、同部に横形文を施す井戸尻系の影響を受け、伊那独自の土器群と考えられ、口縁部は異なる文様を粘土紐で貼り付け文様を構成してある。21～25は、隆起線文と沈線による文様体。26は、波状口縁で縄文地文に沈線文様を施す。27は、縄文の地文に隆起線文様、26・27は飛び込み遺物で後葉II～III期と思われる。28～35は、口縁部で隆起線文様、隆線を交差させた籠目文、波状口縁に連続押引文等である。30・33は、縄文地文に隆帶及渦巻文で加曾利E系のもの。36は、縄文地文に結節縄文を施す五領毛台期と思われる。37は、無文で米アゲイザル形の浅鉢で広口の片口形、口縁の一部に刻目装飾がなされている。38・39は、無文土器。40は、地が縄文、41～57は、無文の底部。58は、蛇頭把手、原村居沢尾根遺跡に類例を見る。59は、土偶。

石器 60は、磨製石斧。61は、打製石斧。62～67は、粗製石匙。68は、横刃形石器。70は、磨製の棒状石器。71は、黒曜石のドリルで炉の灰の中より出土。71は、黒曜石の石礫。(小木曾)

第1号住居址

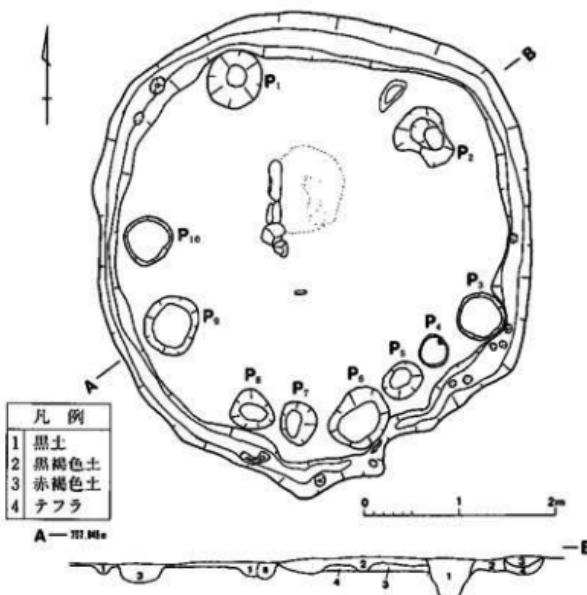
遺構(第10図、図版6)

本住居址はG-13・14区内に確認されたもので、耕土を除去するとその直下のテフラを切込んで作られた住居址である。規模は東西4.7m、南北4.8mではほぼ円形を呈した住居址である。壁のほとんどは耕土中に存在したと思われ、壁面の状態は明らかではないが壁に設けられた周溝はほぼ全体に巡っている。周溝は幅15~20cm、深さ10~22cmの舟底形で所々に小穴が認められた。床面は、耕土が浅かったせいか一部固い

個所が認められた程度である。主軸の方向はE78°で、東側が入口かと思われる。炉は北側の炉石が抜かれた状態の石囲炉で、炉内には木炭と焼土が認められた。床面に設けられたピットは10個で、その内P1、P2、P3、P7、P8、P9が柱穴かと考えられる。P6は長径62cm、短径50cm、深さ70cmで底部が平らの直穴であるところから貯藏穴かと思われる。

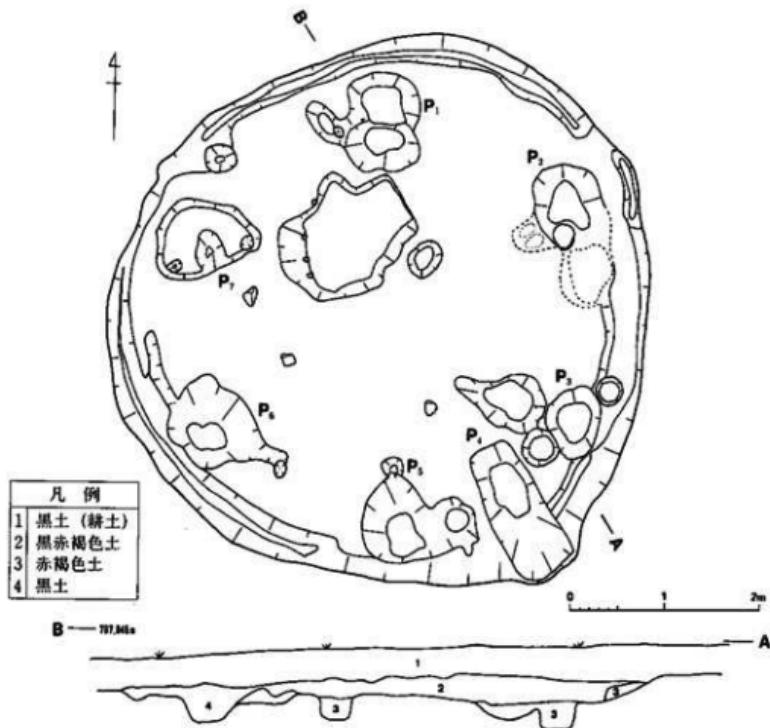
遺物(第20図、図版19・20)

1は、頸部破片粘土紐を交互に貼付し、縄文中期後葉I期。2は、隆線と隆線の間を竹管具で押引文とし、胴部以下は併行沈線文が施された縄文中期後葉II期。3は、文様は隆線文と斜状の竹管文土器で、縄文中期後葉II期。4は、縦の隆線文と半截竹管文土器で縄文中期後葉II期。5は、地文に斜縄文を施し竹管具による文様が施された土器で、縄文中期後葉II期に比定される。6は、縄文が施された壺形様土器で、縄文中期後葉II期。7は半截竹管文土器で、縄文中期後葉II期。8は、無文の縄文中期後葉II期。9は、無文の斐形土器の口縁部で、縄文後期。10は、隆線に連続指圧痕を施した中に押引の竹管文を施した土器で、縄文中期中葉V期に比定される。11は、地文が縄文で、沈線による唐草文土器。中期後葉II期。12は、横位に平行沈線を施した中期後葉II期土器。13は、硬砂岩の横刃形石器。14は、緑色岩製縦形石匕。15は、黒曜石の石鎌。16・17は、硬砂岩の横形石匕。18は、安山岩製凹石。19は、硬砂岩の石皿。



第10図 第1号住居址実測図

第2号住居址



第11図 第2号住居址実測図

造構（第11図、図版6）

本住居址は、G-14、H-14区内の耕作道の下に確認された住居址で、相当固い面が一部に認められた。規模は東西5.7m、南北5.6mで円形のプランを呈した住居址。壁高は25cm前後で、周溝が二重に巡っている箇所も認められ拡張したものと考えられる。床面は一部かく乱されている箇所があるが、固く踏み固められている。炉址は中央より西側に位置しており、入口は東側にあったと考えられる。炉址内には焼土と木炭片が認められ、炉石は抜かれたとみえ周辺に一部抜き残りの小石が認められた。柱穴は、P1、P2、P3、P5、P6、P7と考えられるが、その他P4は、大きさや形状から貯蔵用遺構かと思われる。

遺物（第29図、図版19・28）

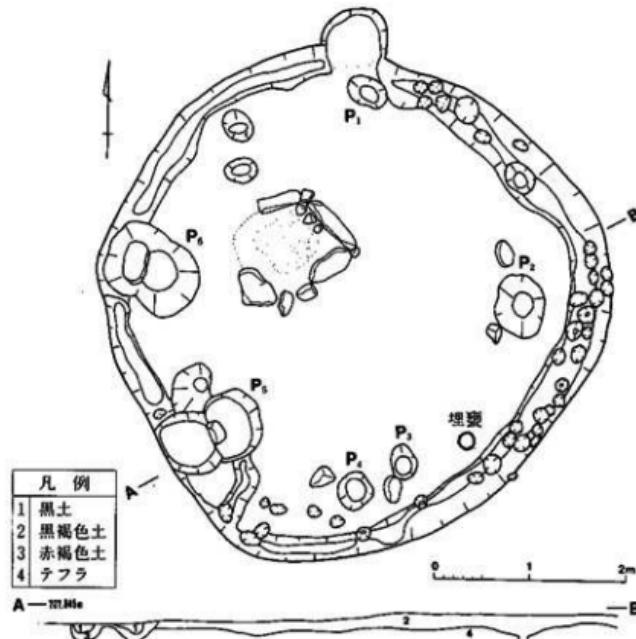
1は、頸部と胴部に粘土紐を貼付し、地文は縄文を施した縄文中期後葉II期の土器。2・3は、地文に縄文、口縁部に隆線による渦巻文が施された縄文中期後葉II期の土器。4は、地文に縄文隆線による渦巻文土器で、縄文中期後葉II期。5は、地文が縄文で隆線文と沈線文による区画がなされた縄文中期後葉II期の土器。6は、縄文地に蛇行沈線文が施され、口縁部に隆線渦巻の施された深鉢形土器で中期後葉II期。7は、隆線による渦巻状文と斜状竹管文と横位の併行線文が施された縄文中期後葉II期の土器。8・9・10は、縄文地に沈線による渦巻文と蛇行沈線文の縄文中期後葉II期の土器。11は、隆線に半截竹管文の深鉢形土器で、縄文中期後葉IV期。12・13は、無文の縄文中期後葉II期土器底部。14は、硬砂岩の凹石で、裏面が蜂の巣石。

第3号住居址

造構（第12図、

図版7）

本住居址は、G
—14・15区内で耕
土の直下に確認さ
れた。規模は東西
5.4m、南北5.0m
で、ほぼ円形を呈
する。壁に添って
設けられた周溝は
15~25cm幅で、中
に10~15cm内外の
小ビットが壁保護
用に設けられてい
る。床面は一部固
い叩面が認められ
たが、全体的には
かく乱されてい
た。柱穴はP1、
P2、P4、P6



第12図 第3号住居址実測図

と考えられ、炉址は中央よりやや西側に位置し、方形の石窯炉で50cm程度凹んでいた。

遺物（第30図、図版19・28）

1は、隆線と隆線の間につまみ状の連続刺突を施した中期後葉II期の土器。2は、地文に竹
管文が施され蛇行隆線が施された深鉢形の土器頸部で中期後葉II期。3は、隆線と籠目文が施
された中期後葉I期に比定される土器。4は、隆線による唐草文様の間を沈線文で充填された

中期後葉の土器。5は、口縁部に隆線による唐草文と縄文が施された中期後葉II期の土器。6は、地文が縄文で結節文が施された中期後葉II期の土器。7は、隆線による十字文を施し、その中心に粘土紐を溝状に積み重ねた深鉢形土器の口縁部。中期後葉II期。8は、沈線による唐草文様の中を竹管具により連続刺突文が施された中期後葉II期に比定される土器。9・11は、棒状具による縦位沈線文が地文で、蛇行沈線文が施された中期後葉II期の深鉢形土器。10は、地文に矢羽沈線が施された中期後葉III期の土器。12は、無文の浅鉢形土器で口縁内に横位に沈線が施された中期後葉II期。13は口縁に唐草文の施された中期後葉II期埋甕。14は、無文の浅鉢形土器で口唇に沈線文と連続刺突文が施された中期後葉III期に比定される土器。16は、緑色岩の磨製石斧。17は、硬砂岩の縦形石匕15は、深鉢形土器の把手で中期中葉末。(早川)

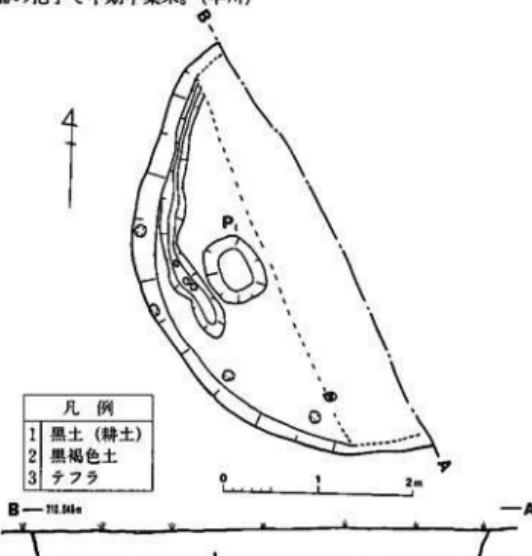
第4号住居址

造構(第13図、図版7)

本住居址は、H-14・15区内に確認され、以前サイロ建設の折に3分の2が破壊されてしまった。正確な規模は不明であるが、ほぼ円形を呈していると思われる。西側の壁に添い、幅15~25cm深さ5~10cm内外の周溝がある。P1は、東西60cm南北70cmの直穴に近い方形で、柱穴かと思われる。床面の南側に一部固い面が認められた。

遺物(第31図、図版20・28)

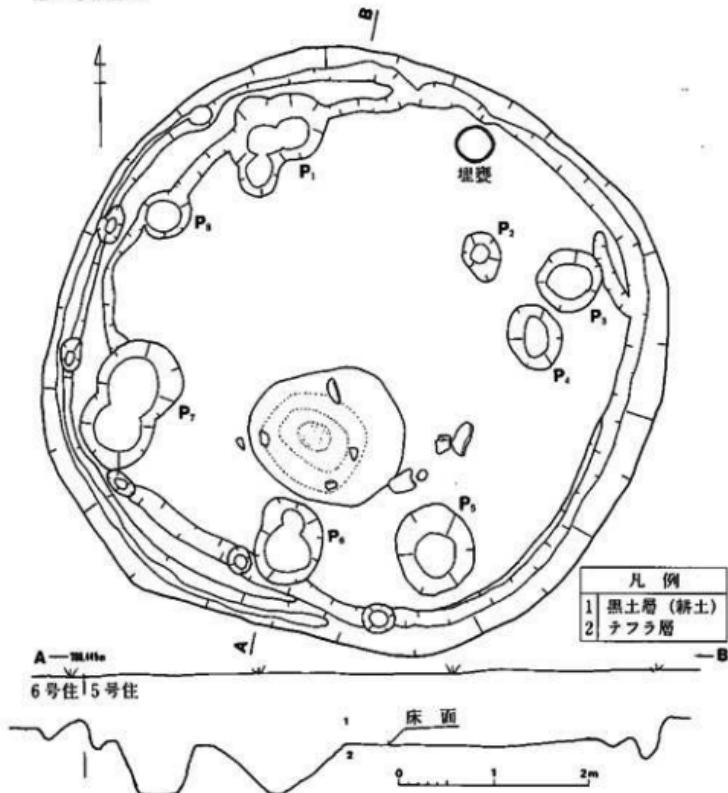
1は、縄文地に結節縄文が施された中期後葉I期の厚手土器。2は、縄文厚手土器。中期後葉I期に比定される。3は、縄文を施した口縁部を折返し、下部に竹管により



第13図 第4号住居址実測図

縦位の平行沈線文を施した平出III Aに併行する土器。4は、頸部に隆線文、胴部に縄文と縦位の結節縄文のある中期後葉II期の土器。5は、隆帶に爪形を施し胴部に棒状器具で平行線文を施した中期後葉I期の土器。6~8は、隆線による区画文や把手を付す中期後葉II期。9~12は、縄文地の中期後葉I期土器。10は、地文が縄文、結節文が施された中期後葉II期土器。11は、棒状器具による中期後葉II期の平行沈線文土器。13は、厚手の無織維羽状縄文の崩れた土器で時期不明。14は、縄文と無文の中期後葉II期と思われる。15は、細い沈線の施された中期後葉II期。16は、無文で中期後葉II期と思われる。17は、径56cm、高さ61cm、口縁に隆線と渦巻文、縦の沈線が引かれた頸部と胴部に縄文と結節文が施された中期後葉I期の伏甕、底部穿孔土器。18・19は硬砂岩打製石斧。20は、硬砂岩製横形石匕。(早川)

第5号住居址



第14図 第5号住居址実測図

造構（第14図、図版8）

本住居址は、H-15・16区内に確認され、規模は東西6.7m南北6.4mでほぼ円形を呈している。壁はややなだらかで、壁高は25~50cm前後。壁に添って幅15~23cm、深さ8~26cmの周溝が巡っている。周溝内には径7~10cm深さ6~24cm前後の小ピットがある。主柱穴はP₁、P₃、P₅、P₇と考えられ、他は副柱穴または建替との補助穴と思われる。炉址は中央よりやや南に位置し、規模は1.4m前後で深さ45cm。底には焼土が認められた。炉石は抜き取られたのか認められなかった。炉を中心として覆土中に多くの土器片が出土し、住居址北壁に接して埋甕が出土した。住居址の南から西にかけて二重の周溝が認められたが、主柱穴の間に拡張か底の高さの異なるピットが設けられているところから、建替を機に住居を拡張したものと考えられる。

遺物（第32・33図、図版20・21・28）

1は、深鉢形土器の把手で中期後葉I期。2は、深鉢形土器の口縁内面に隆線文と竹管による連續文の施された中期後葉I期土器。3は、隆線による渦巻文に二重の刺突が施され、胴部に竪状器具による沈線文が施された中期後葉III期土器。4・7は、隆線による唐草文土器で中期後葉II期。5は、隆線による渦巻文と横位に区画文の中を沈線刺突文で充填した深鉢形土器で中期後葉II期。6は、地文が縄文で縦位に結筋文が施された中期後葉II期土器。8は、隆線と沈線による渦巻文と矢羽文が施された中期後葉II期土器。9は、深鉢形土器の胴部の下部に矢羽文が施された中期後葉III期。10は、土偶の腕部分で中期後葉II期。11・12は隆線文の施された中期後葉II期土器。13は、沈線による矢羽文が施された中期後葉III期土器。14は、無文で粗製の土器。15は、大型の唐草文埋甕で中期後葉II期。16は、口縁部文様に区画が逆「U」字文が施された中期後葉III期。17・18は、深鉢形土器の厚手の底部で中期中葉V期に比定される。19は、胴部が縄文で底部に近い部分が無文の中期中葉V期と考えられる土器。20は、地文が縄文で沈線による唐草文が施された中期後葉II期土器。21は、緑色岩製の敲打器。22は、打製石斧。23は、黒曜石Scraper。24は、チャートの石匕。（早川）

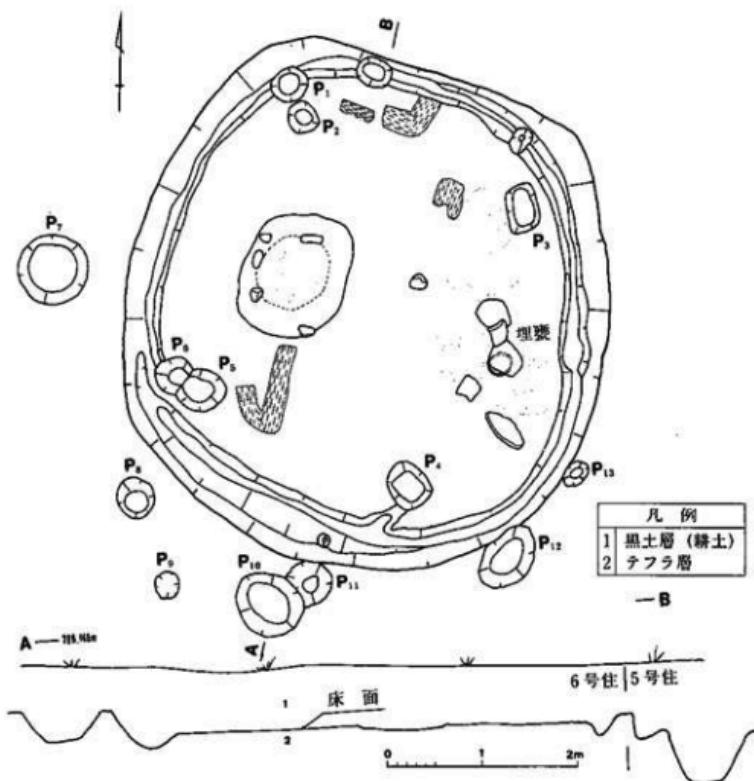
第6号住居址

造構（第15図、図版8）

本住居址は、G-16区内に確認され、規模は東西5.1m南北5.3mではば円形を呈している。壁高は25~35cm前後を測り、周囲には大小の小ピットが検出されたが住居址にどう関係するのか明らかではない。周溝は幅18~25cm、深さ7~23cmで周溝内に径20cm前後、深さ15~26cm前後のピットが検出された。床面は固く叩かれている。柱穴はP1、P3、P4、P6と考えられる。床面には径15~18cmの薬材の炭化材が3ヶ所残存し、付近には炭化物と焼土が検出されたことより、火災に遭った住居かと考えられる。炉址は中央よりやや西側にあり、径1.2m深さ50cmで舟底形にくぼんでいる。住居址東壁付近に口縁部を下にした埋甕が出土し、その上には30cm程の階円形の石ぶたが置かれていた。炉址付近より土偶の足部分が出土した。（友野）

遺物（第34・35図、図版21・28）

1~3・9は、口縁部が無文帯で二本の隆線を平行に描き、渦巻文や棒状施文具によって平行沈線が施された中期後葉II期の土器。4は、地文が縄文で口縁部のみに隆線による渦巻状文を施した中期後葉II期の土器。5・6は、口縁部が細い無文帯で胴部に無筋の縄文を施した中期後葉II期の土器。7は、地文に半截竹管による平行沈線が施され、縦に沈線の蛇行文が引かれている土器で中期後葉II期。8は、地文に平行沈線文が施され、隆線による区画文がつけられた中期後葉II期の土器。10は、無文の口縁部土器。11は、隆線による区画文内に隆線をつぶす充填手法のなされた中期後葉II期の土器。12は、土偶の足の部分。特に紐で結んだ形は注目すべき点であり、中期後葉II期。13・14は、埋甕、隆線の渦巻文の間を矢羽文で充填した深鉢形の中期後葉II期土器。15は、胴部へ棒状施文具により縦位に平行沈線文が施されている深鉢形の中期後葉II期土器。17は、地文に縄文と蛇行沈線文が施された中期後葉II期土器。18・20



第15図 第6号住居址実測図

は、器形がキャリバー形の深鉢形土器で、口縁部と頸部に隆線や沈線による多様な文様が施されており、胴部に沈線による矢羽文が施文された中期後葉II期土器。19は、有孔鋲付土器、口縁部は無文で、胴部には沈線で不整形の溝巻文があり、その中に刺突文で充填した土器である。伊那谷には類例が少ない。21は、緑色岩の磨製石斧。22は、磨製石斧。23・24は、黒曜石のScraper。16は、沈線による唐草文を主体とした深鉢形埋甌で、口縁部が波状で胴部は縦位に平行沈線文が施され、その間に蛇行沈線文が引かれた中期後葉II期の土器。

(早川)

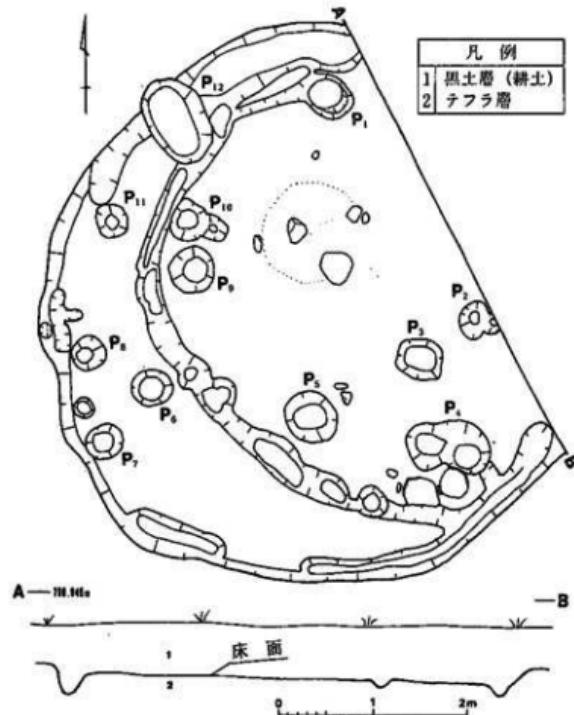
第7号住居址

造構(第16図、図版9)

本住居址は、H-16区内に確認され、住居址の東側は調査対象区域外で家畜飼料用小屋があったため調査することができなかった。規模は南北5.8mで、円形を呈すると思われる。壁はなだらかで、壁高10~20cm前後。ピットは12個検出され、柱穴はP3、P5、P9と思われる、周溝が二重に巡っており、ピットが多いことから拡張されたものと考えられる。床面はやや軟かで、覆土より多数土器片が出土した。

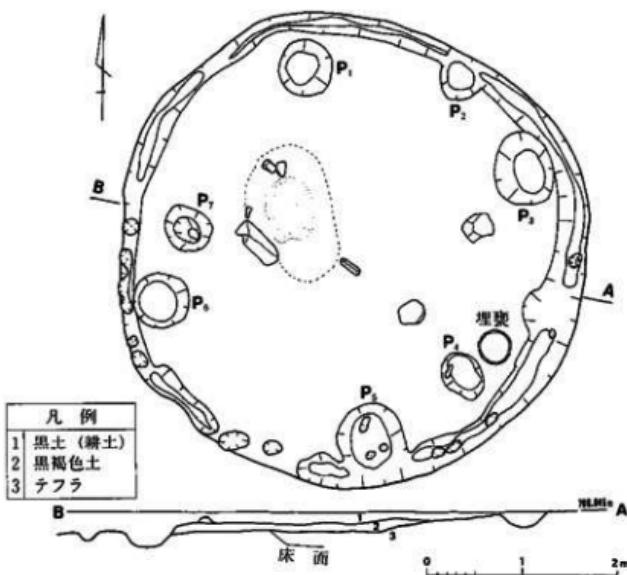
遺物(第36・37図、図版21・22・28)

1は、口縁部に渦巻文と渦巻文の間に沈線文を「U」字に充填し、頸部に隆線で区画文を付した中期後葉I期土器。2は、口縁部無文帯で二本の隆線の中に竹管による沈線で充填、頸部下は繩文の中後葉II期土器。3は、二本又は三本の隆線で三角ないし階円形に区画し、間を縦横位に充填した中期後葉I期土器。4・5は、頸部くびれの少ない無文土器で中期後葉I期と思われる。6は、籠目文の深鉢形土器で中期後葉I期。7は、隆線文と斜状文に連絡刺突文が施工された中期後葉I期土器。8は、竹管具の斜線文、粘土紐の積み上げ渦巻文、胴部地文に沈線の渦巻文が施された中期後葉II期土器。9は、二本の隆線区画文に竹管具の斜線文が施され口縁部が内曲した中期後葉II期土器。10は、棒状施文具により逆U字文を描き、その間を平行沈線で充填した中期後葉II期土器。11は、繩文の地文に縦二本の太い沈線文で区切り、間に蛇行沈線文を施した中期後葉II期土器。12は、繩文の地文で上部に隆線の渦巻文を配し、縦位に四本の隆線が懸垂する中期後葉II期土器。13は、無文の土器口縁部で中期後葉II期。14は、隆線文と矢羽文の深鉢形土器で中期後葉II期。15は、打製石斧。16は、磨石。17は、黒曜石のScraper。(友野)



第16図 第7号住居址実測図

第8号住居址



第17図 第8号住居址実測図

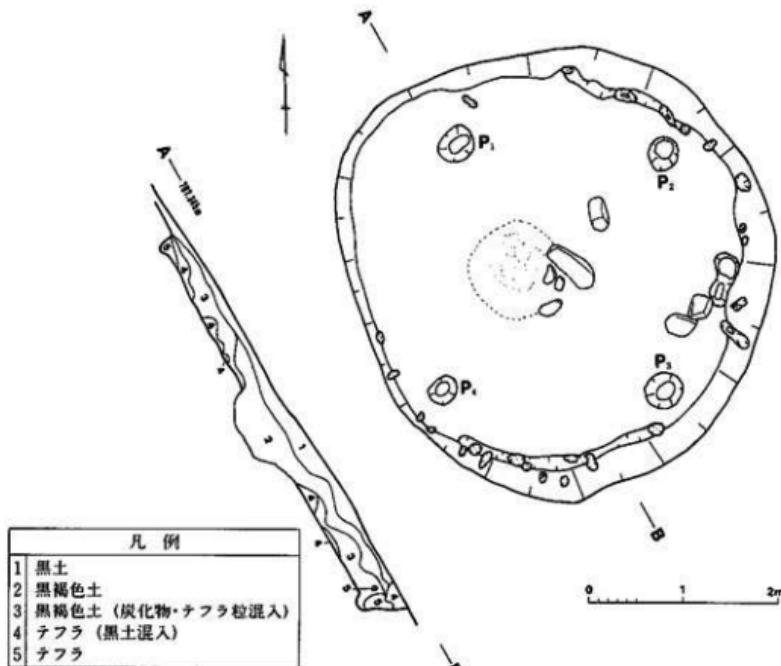
造構 (第17図、図版9)

本住居址は、G—16区内に確認され、規模は東西4.9m南北5.0mで円形を呈している。やや南と西に傾斜している。床面は少し軟かで、柱穴はP₁、P₃、P₄、P₆と考えられる。柱穴は径50~70cm、深さ30~50cmを測る。壁は耕土が浅かったせいかほとんど認められなかつた。周溝は壁にそって巡っており、周溝内には小ピットが設けられていた。住居址東側に埋甕が周溝に接して出土した。

造物 (第38図、図版22)

1は、埋甕、隆線による唐草文様が施され、その中を矢羽文様で充填した深鉢形土器。中期後葉II期で、上伊那地方に多い。2は、口縁部に平行に粘土紐を貼付した中期後葉I期土器。3は、隆線の上部に連続押引文を施し、籠状工具で縦位と斜位に沈線が引かれた中期後葉II期の土器。4は縦位に平行沈線文が施され、その中に沈線による蛇行文を垂下させた中期後葉II期の土器。5は隆線による区画がなされた中を箇歯状工具で平行沈線が施された中期後葉II期の深鉢形土器。(早川)

第9号住居址



第18図 第9号住居址実測図

造構（第18図、図版10）

本住居址は、G・H-13区内確認され、規模は東西4.5m南北4.7mの円形を呈した住居址である。壁はなだらかで、壁高は20~35cmを測る。周溝は北東と南側に添って一部認められた。周溝は幅10~20cm、深さ6~20cm前後で、周溝内に径7~15cm程の小ビットが認められた。床面は固く踏み固められており、やや北側が高い。柱穴はP1~P4と考えられる。炉址は住居址のほぼ中央にあり、その規模は径1m、深さ40cmで底部に焼土が認められる。炉址の脇には長方形角の焼けた片麻岩の炉石と思われる石が、やや移動した位置にある。これは、住居移動の折に動かされたような形であり、隣接して焼けた石があった。

遺物（第39図、図版28）

1は、無文地に隆線を貼付して施文した深鉢で、中期後葉II期と考えられる。2は、口縁部は無文帶で、頸部に二本の隆線がめぐり、胴部は縦位に帯状器具による平行沈線文がひかれ、さらにその中を唐草文や蛇行沈線文が施された深鉢形土器で、中期後葉II期。3は、隆線の平行線文や渦巻文が施され、胴部は沈線による矢羽文が施された深鉢形土器で中期後葉II期。4は、地文が網文で隆線により区画された中期後葉III期の土器。5は、隆線や沈線で装飾された

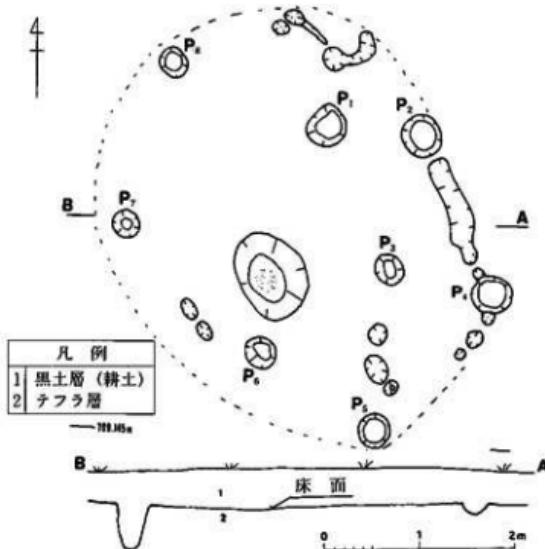
中期後葉Ⅲ期の土器。6は、粘土紐で横位や縱位に平行線や渦巻文を施し、胴部においては横位に矢羽文で充填した深鉢形土器の口縁部で、中期後葉Ⅲ期。7は、地文を櫛齒状器具で施し、その中に蛇行沈線文が描かれている中期後葉Ⅲ期の土器。8は、隆線による懸垂の区画文が施され、胴部に刺突による充填がなされている深鉢形土器で、中期後葉Ⅲ期。9は、炉址にあった蜂の巣石。10は硬砂岩の打製石斧。11は、黒曜石の横刃形石器。12は、硬砂岩の横刃形石匕(早川)

第12号住居址
造構(第19図、図版11)
 本住居址は、F-15・
 16区内に確認された住居
 址で、規模は東西3.7m南
 北4.5mの隅丸方形のア
 ブランと考えられる。壁は
 北側でわずか5cmを測る
 のみで、他はほとんど跡
 を残していない。このこ
 のとは、造構の大半が黒
 色土層に掘り込んで作ら
 れたためと思われ、わず
 かに周溝とピット、炉址
 が確認されただけであ
 る。柱穴は、P1、P3、
 P6、P7かと思われ、
 床面の叩き面はほとんど
 認められなかった。炉址

は中央よりやや南側に設けられ、長径1m、短径70cm、深さ25cmで底部に焼土が認められた。

造物(第40図)

1は、無文で底部付近の土器片。2は、隆線で区画された口縁部破片。3は、無節の斜繩文土器。4は、地文に沈線で施した土器。5は、地文が繩文の胴部破片。6・7は矢羽文の胴部破片。8は、無文土器。以上の土器は小破片で器形をうかがうことができないが、時期は繩文中期後葉Ⅲ期と考えられる。(友野)



第19図 第12号住居址実測図

第13号住居址

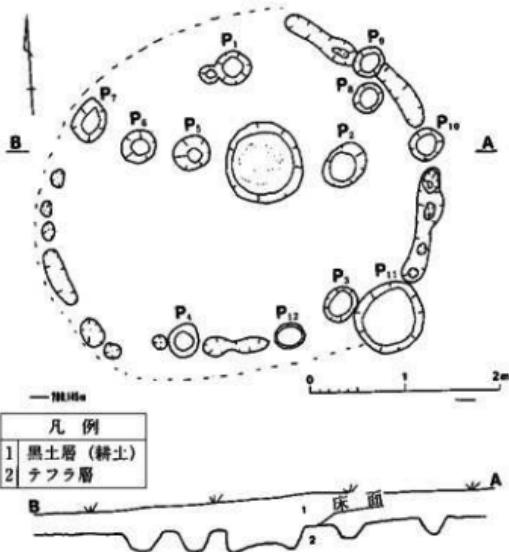
遺構（第20図、図版12）

本住居址は、F・G-15区内に確認され、東西4.3m南北3.6mの隋円形の住居址かと思われる。この住居址もほとんど壁を失っており、床面は耕作等で破壊されており叩き面は確認できなかった。柱穴はP1、P2、P4と考えられるが、他は明らかではない。炉址は中央よりやや北側に位置し、径80cm深さ20cmで底部に焼土が認められた。住居址周辺には、径10~20cm、深さ10~20cm前後的小ビットが不均等に認められた。本

址からの出土遺物はなかった。（友野）

土塙（第21図、第1表、図版13.14）

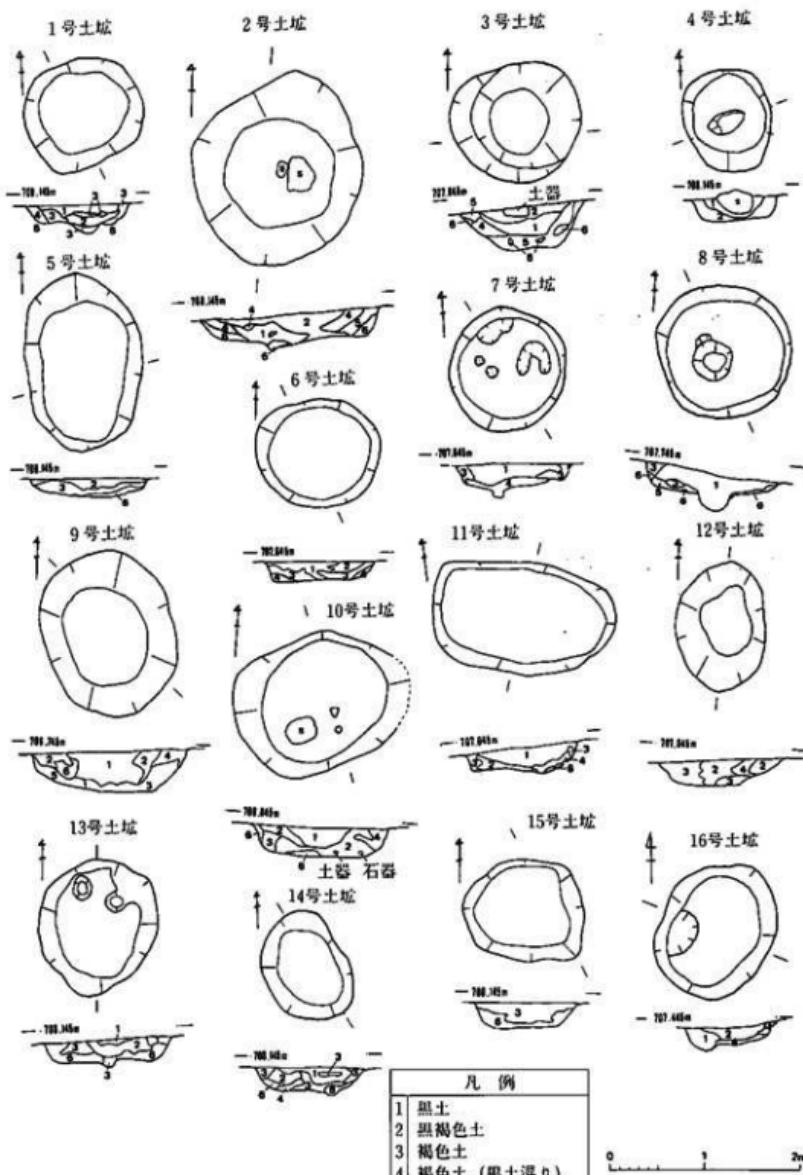
土塙は、住居址周辺に集中して16基検出された。時期は、縄文中期中葉・後葉となる。詳細については土塙一覧表にまとめた。



第20図 第13号住居址実測図

番号	位置	平面形	断面形	長径cm	短径cm	深さcm	備考
1	H-17	不整円形	舟底形	130	108	20	
2	G-16	不整円形	舟底形	204	176	28	縄文中期後葉土器片20片
3	G-16	不整円形	たらい形	138	80	44	縄文中期後葉土器片15片
4	G-17	楕円形	たらい形	106	80	24	
5	G-17	楕円形	舟底形	186	142	20	
6	F-16	円形	たらい形	130	114	20	
7	G-15	円形	たらい形	140	128	26	
8	G-15	円形	舟底形	148	136	25	
9	H-12	楕円形	舟底形	174	133	42	縄文中期後葉土器片1片
10	H-12	不整円形	たらい形	185	134	30	縄文中期後葉土器片25片
11	H-13	楕円形	舟底形	194	114	24	縄文中期後葉土器片10片
12	H-13	楕円形	舟底形	138	94	26	縄文中期後葉土器片1片
13	G-17	楕円形	たらい形	144	124	24	
14	G-17	楕円形	たらい形	116	82	24	
15	G-17	不整円形	たらい形	128	106	26	縄文中期後葉土器片5片
16	G-13・14	楕円形	舟底形	150	120	20	縄文中期後葉土器片2片

第1表 土塙一覧表



第21図 土塚実測図

遺物（第41図、図版27）

1は、口舌に縄文が施され、口縁部に櫛齒状器具で横位に引き、頸部以下に半截竹管状工具で沈線文が施された。中期初頭Ⅰ期、梨久保式に類例を見る土器。2は、平行條線文土器で、中期後葉Ⅱ期と思われる深鉢形土器の胴部破片。3は、地文が縄文で結節縄文が垂下する中期後葉Ⅱ期の深鉢形土器。4は、平行沈線文が施された中期後葉Ⅱ期土器。5は、半截竹管具で平行沈線が縦位に施された中期後葉Ⅱ期土器。6は、沈線による渦巻文の区画内を笠状工具で横位に充填した中期後葉Ⅲ期土器。7は、無文の深鉢形土器で、後期Ⅰ期土器。8は硬砂岩製打製石斧。

B地区トレンチ（第22図）

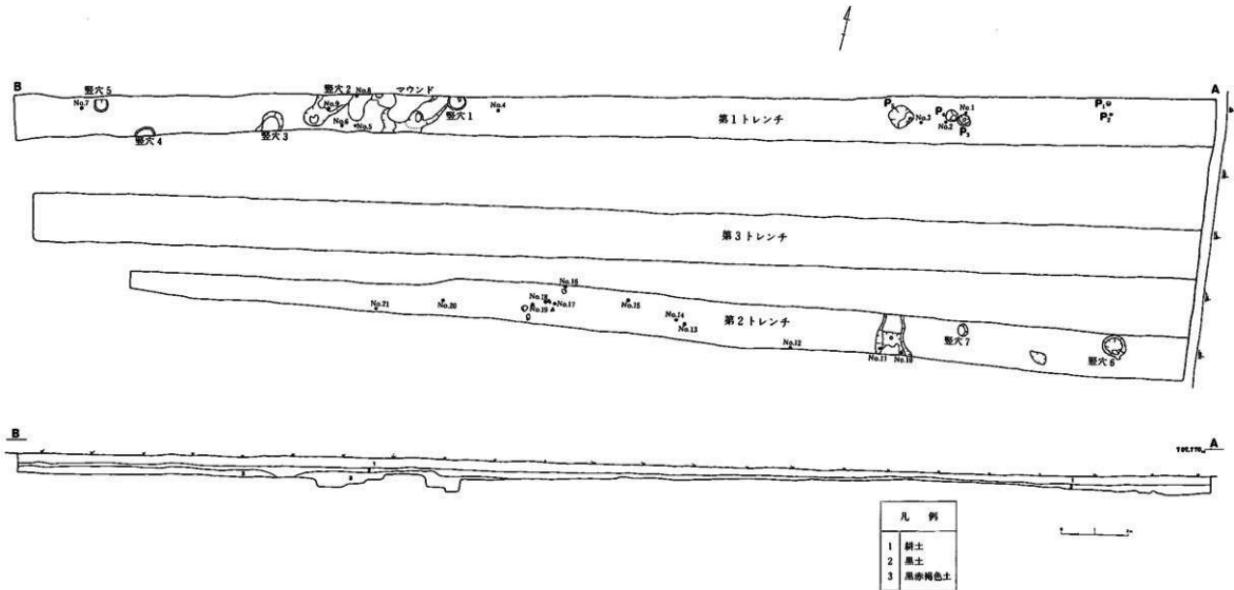
トレンチは、県道美篤箕輪線からの耕作道取付け予定範囲内に第1～第3まで入れた。縄文中期後葉の豊大が第1トレンチから5基、第2トレンチから2基検出された。豊穴はテフラ層を切り込んでつくられていた。

遺物（第42図、図版27）

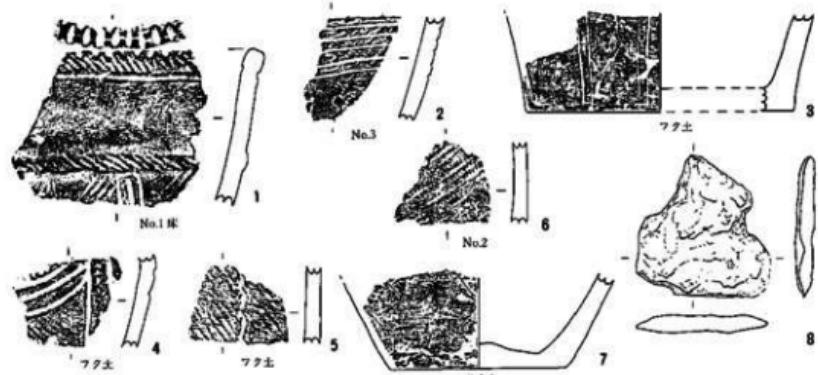
1は、縄文を斜位と縦位に施し、沈線で渦巻文を施した厚手の土器で、縄文中期中葉Ⅴ期と考えられる。2は、隆線文で渦巻状に区画した中を縄文で充填した中期後葉Ⅳ期の深鉢形土器。3は、地文が縄文で縦に沈線を引いた中期後葉Ⅱ期の深鉢形土器の胴部。4は、縦に粘土紐を貼付し、その中を矢羽状文を縦位に沈線文で充填した中期中葉Ⅲ期の深鉢形土器。5は、沈線により渦巻文と矢羽文が施された中期後葉Ⅲ期の深鉢形土器。6は、笠状器具により縦位に「ハ」の字状に施文した中期後葉Ⅳ期と考えられる深鉢形土器。

番号	平面図	長径cm	短径cm	深さcm	備考
1	(円形)	(70)	(60)	(39)	
2	不整円	140	70	68	
3	(不整円形)	(130)	(80)	58	
4	(椭円形)	(80)	(40)	(29)	
5	半円形	50	44	35	
6	円形	100	90	27	
7	円形	50	40	18	

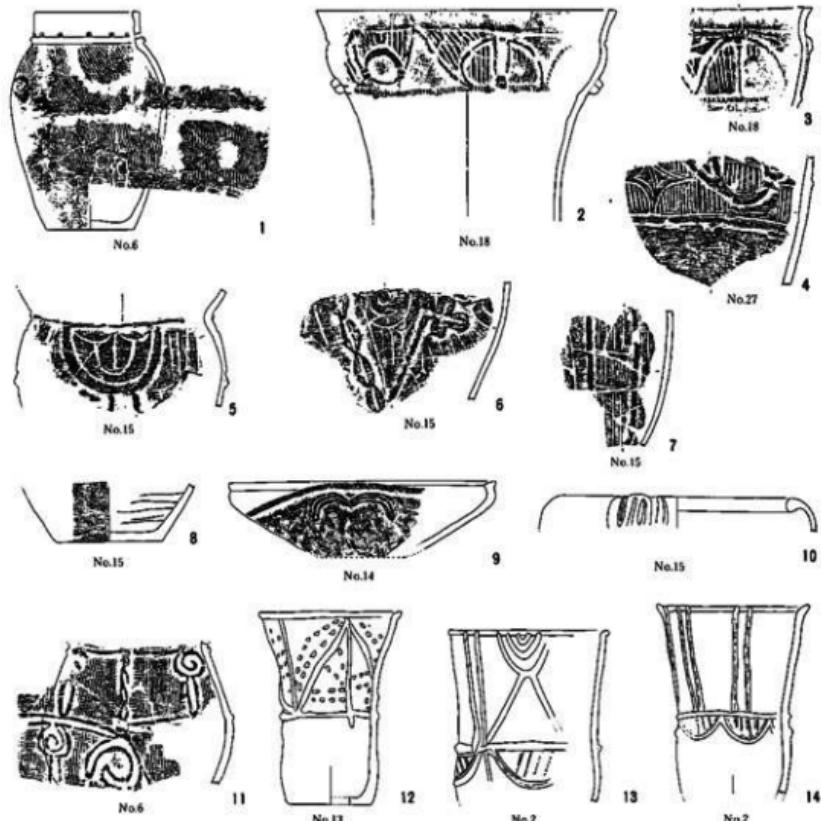
第2表 豊穴一覧表



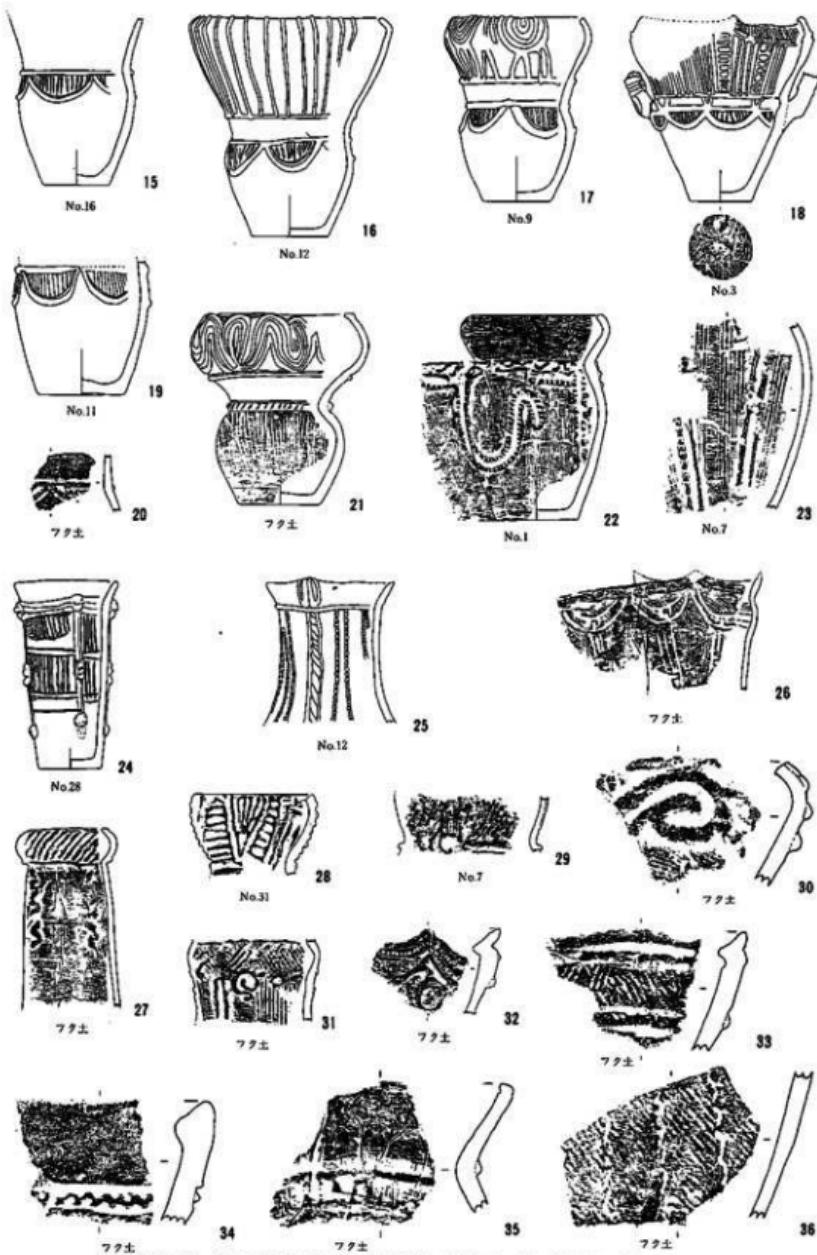
第22図 B地区トレンチ実測図 (1:4)



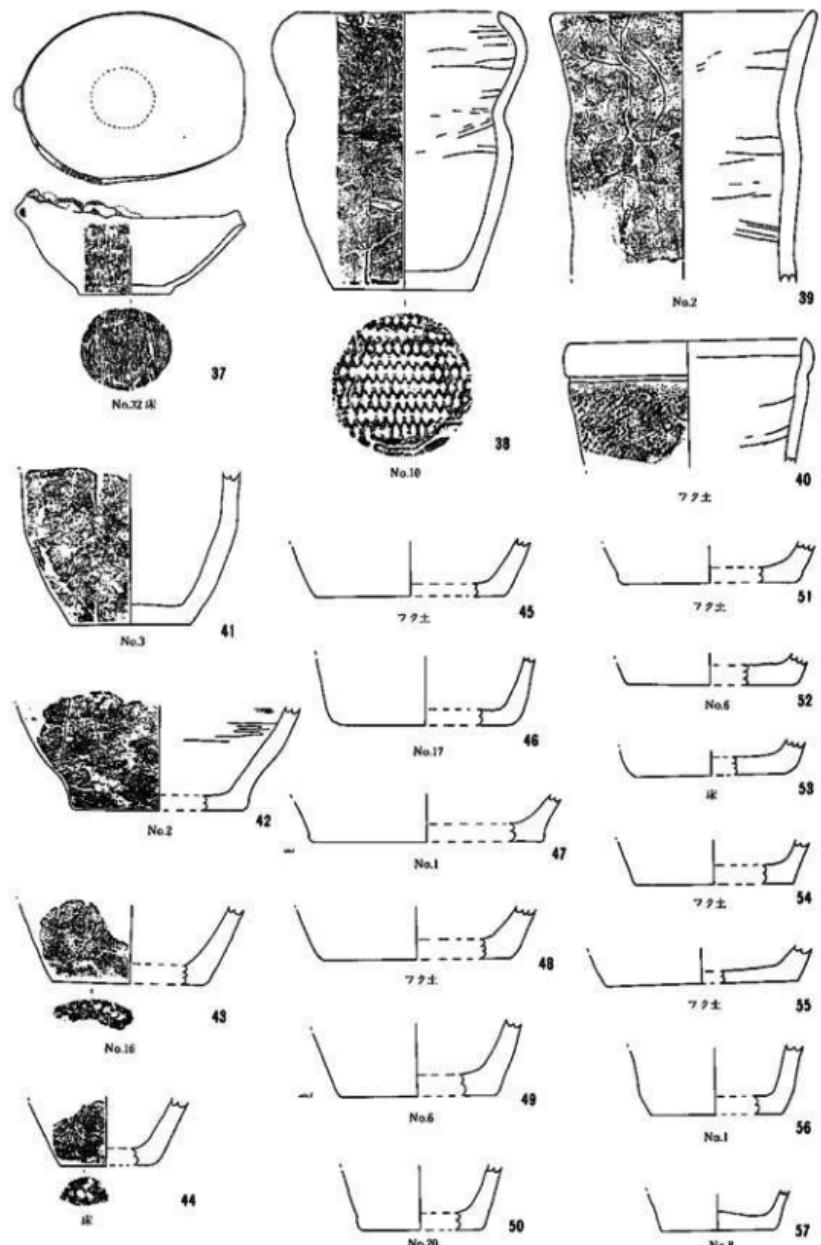
第23図 第11号住居址出土土器拓影及石器実測図 1~8(1:3)



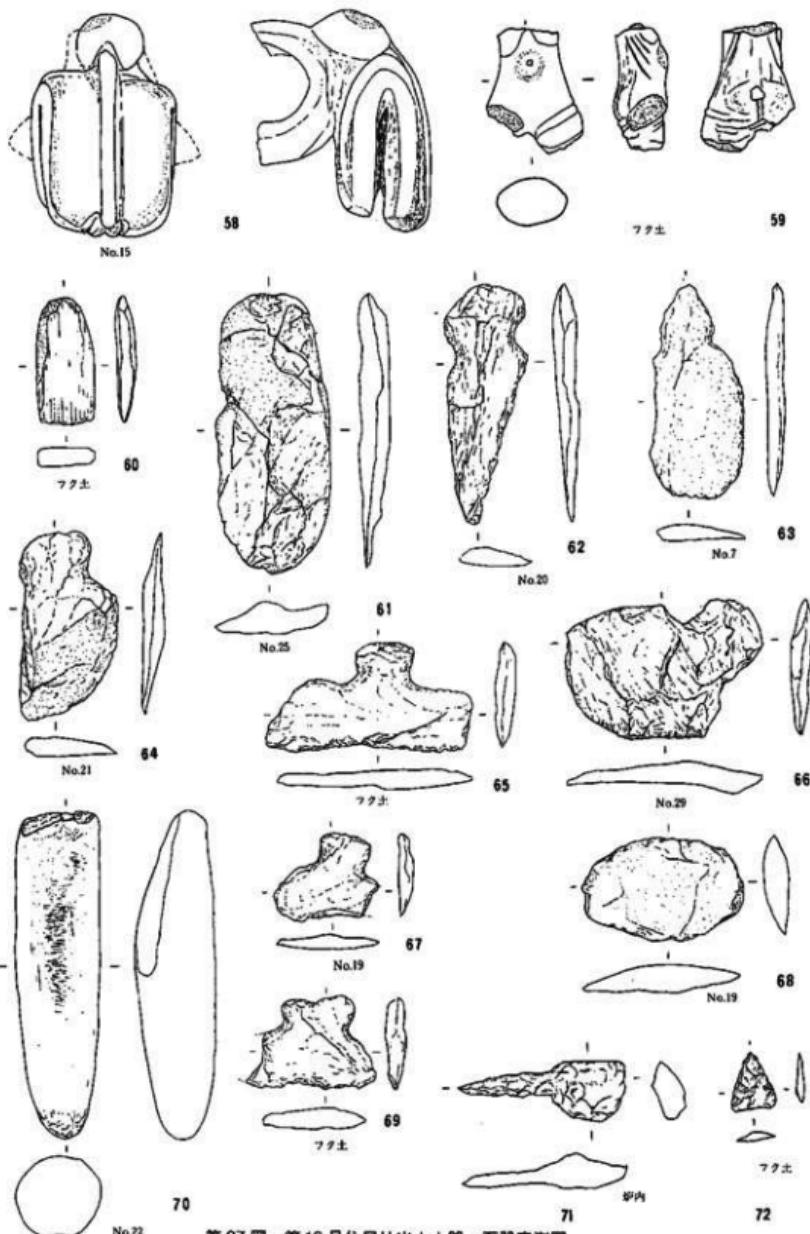
第24図 第10号住居址出土土器拓影及実測図 1~11(1:9)、12~14(1:6)



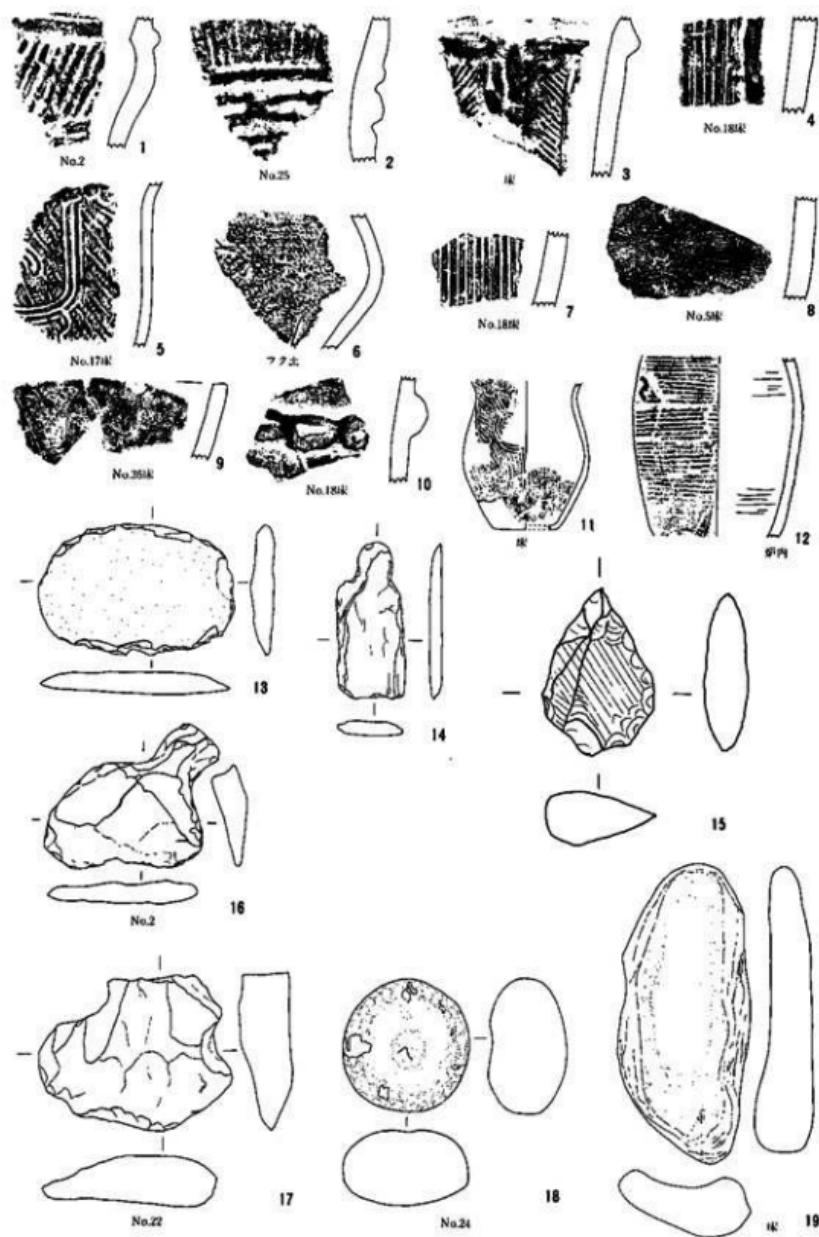
第25図 第10号住居址出土土器拓影・実測図 15~27(1:6)、28~36(1:3)



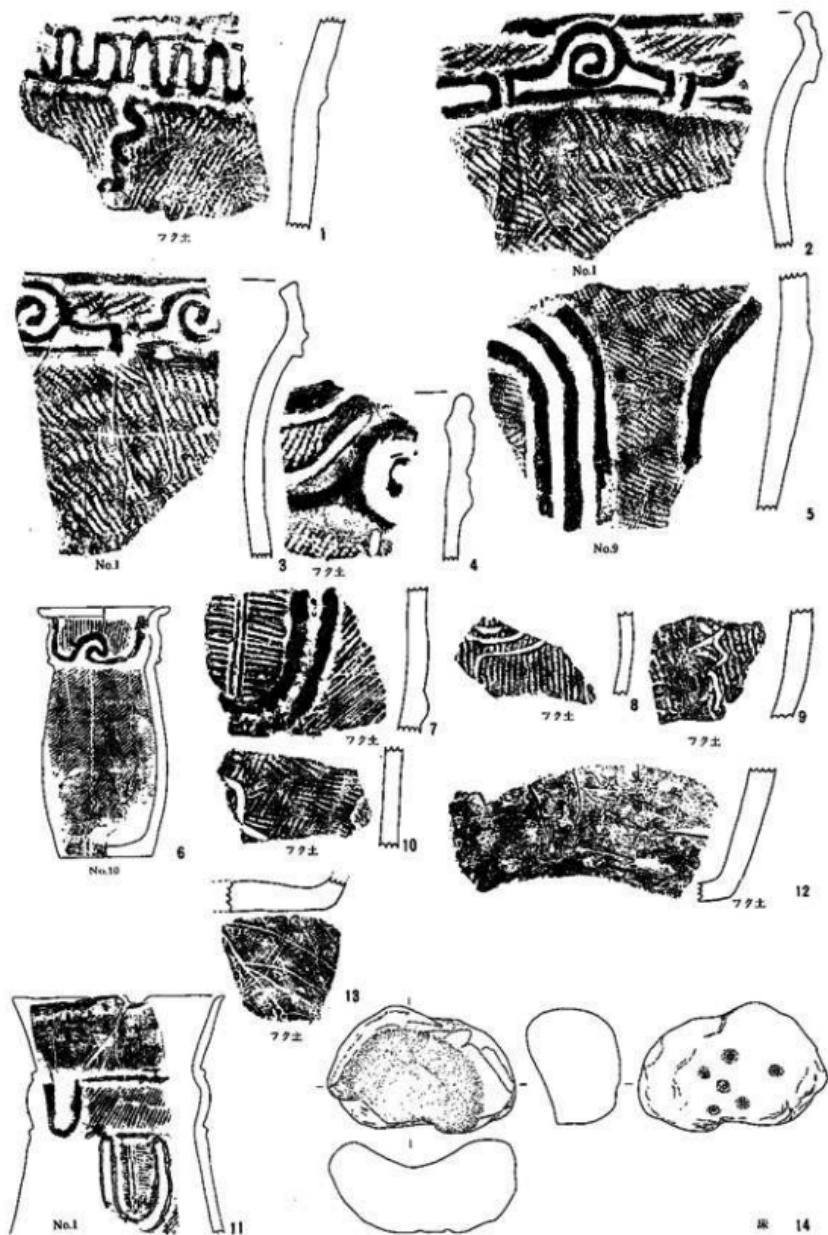
第26図 第10号住居址出土土器拓影・実測図 37(1:6)、38~57(1:3)



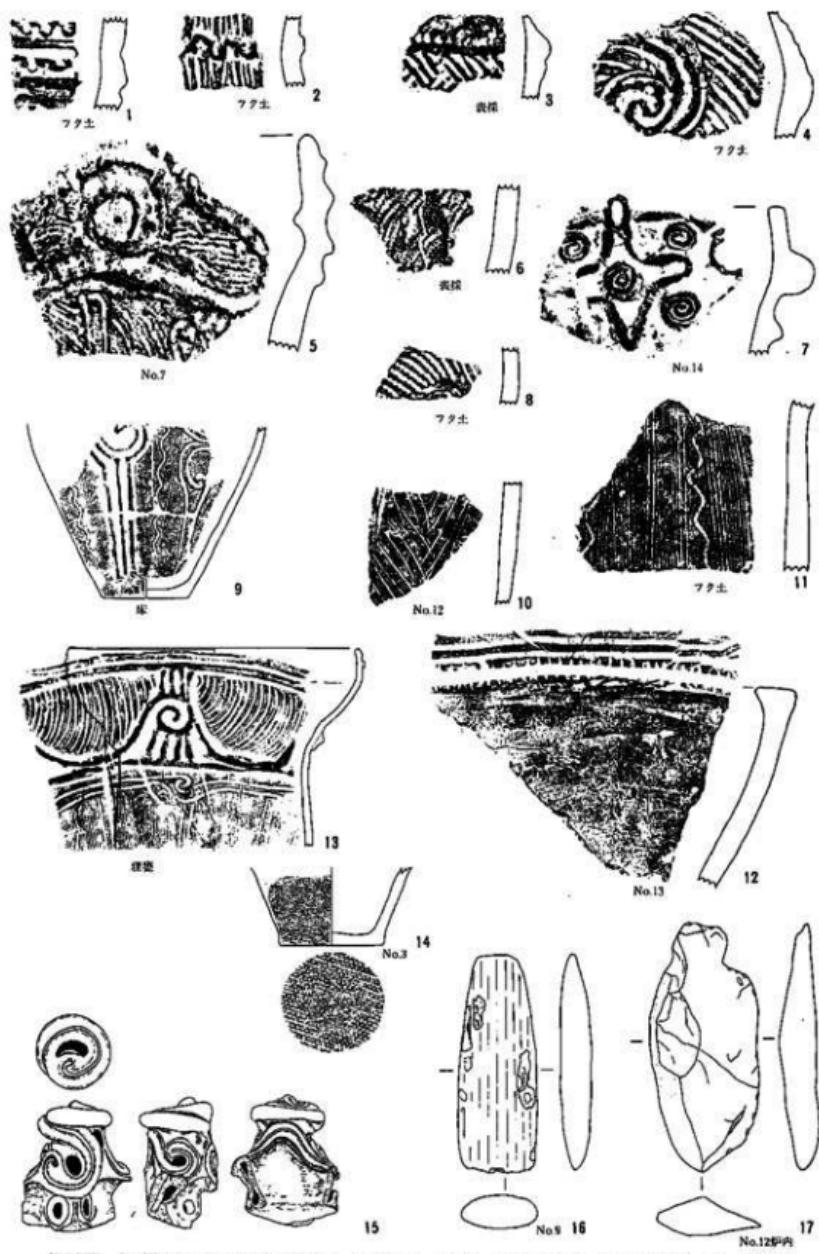
第27図 第10号住居址出土土器・石器実測図
58(1.3)、59(1.5.3)、60~70(1.3)、71・72(2.3)



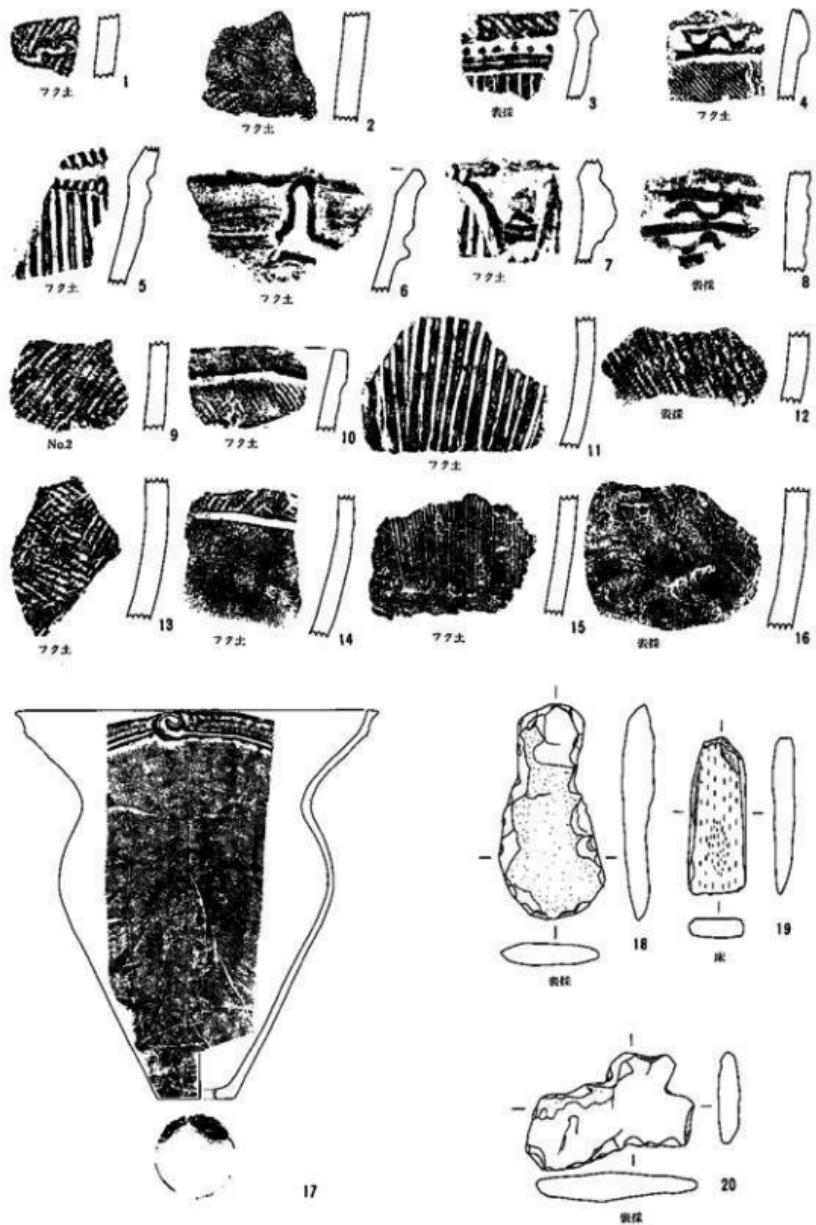
第28図 第1号住居址遺物実測図 1~10(1:3)、11(1:6)、12(1:6)、13、14(1:3)、15(1:1)、16~18(1:3)、19(1:6)



第29図 第2号住居址出土遺物実測図 1~5(1:3)、6(1:6)、7~10(1:3)、11(1:6)、12、13(1:3)、14(1:6)



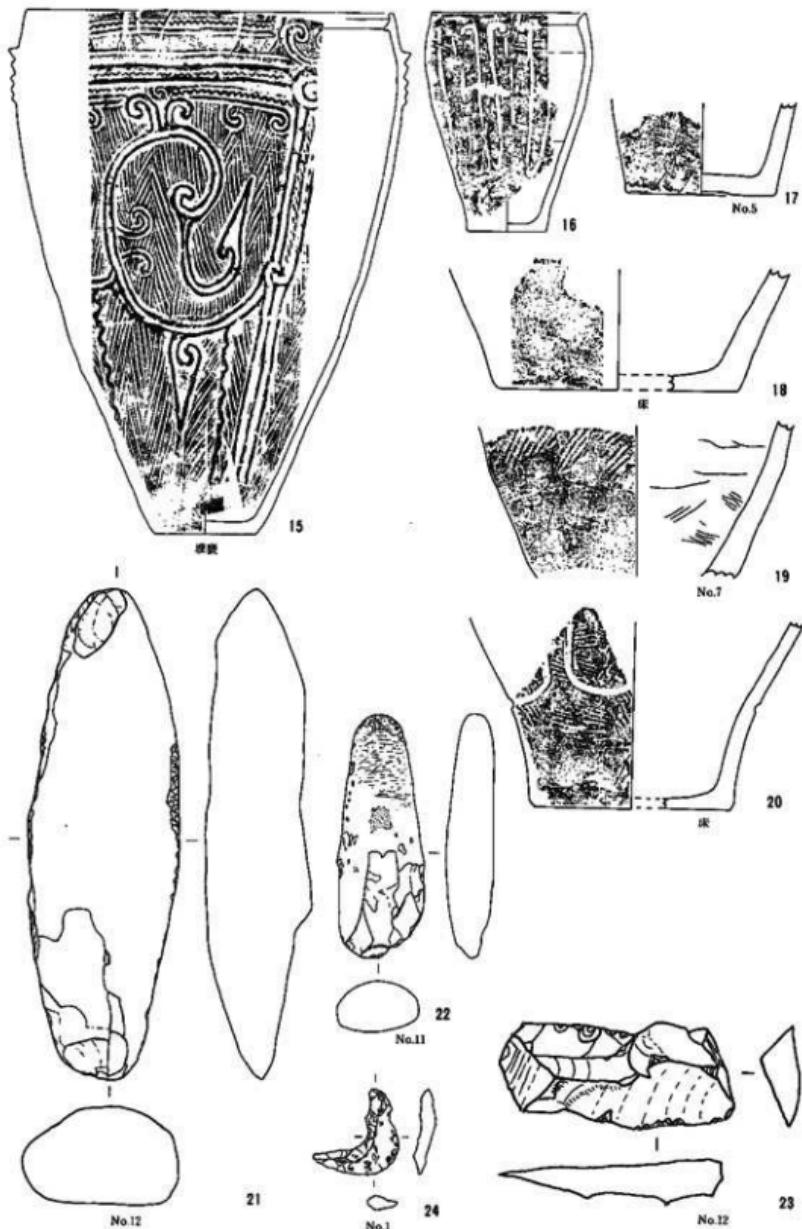
第30図 第3号住居址出土遺物実測図 1~8(1:3)、9(1:6)、10~12(1:3)、13~15(1:6)、16、17(1:3)



第31図 第4号住居址出土遺物実測図 1~16(1:3)、17(1:9)、18~20(1:3)



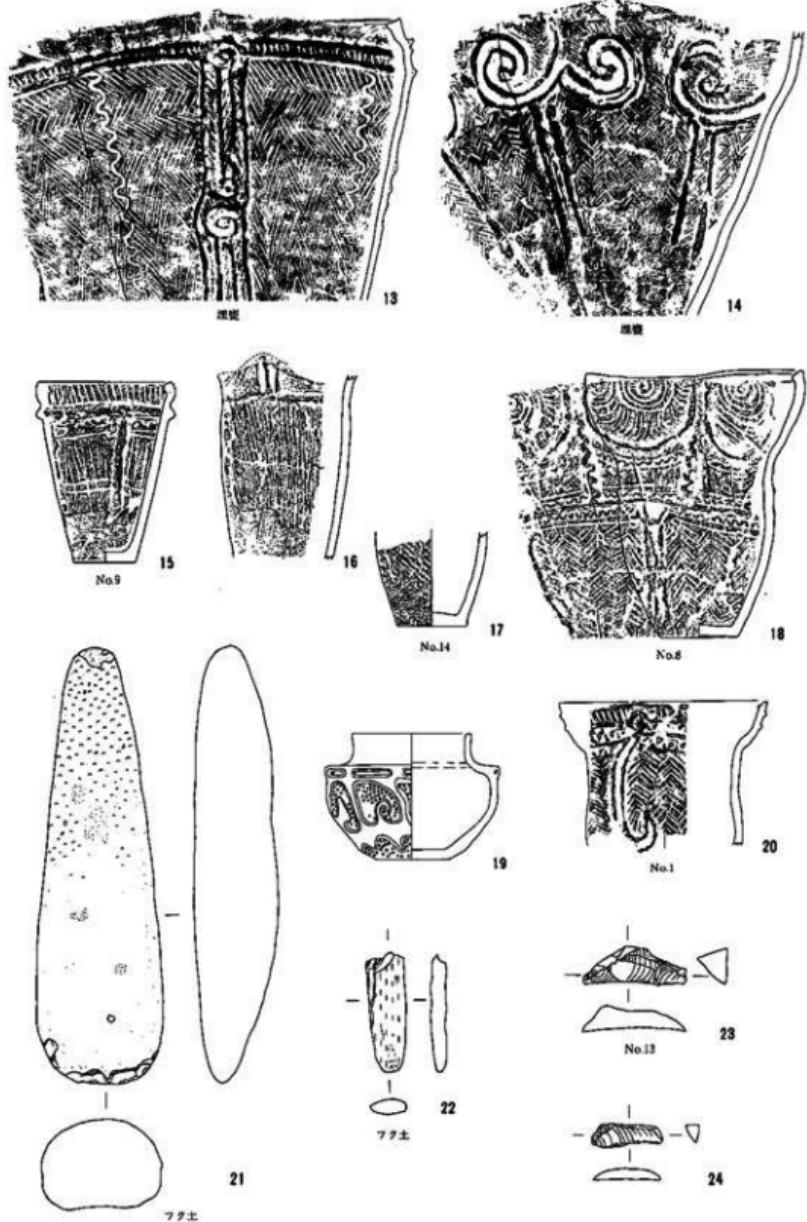
第32図 第5号住居址出土遺物実測図 1~14(1:3)



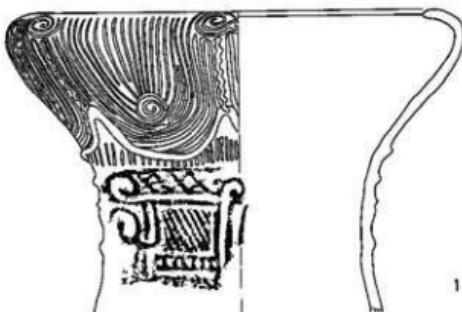
第33図 第5号住居址出土遺物実測図 15、16(1:6)、17~22(1:3)、23(1:1)



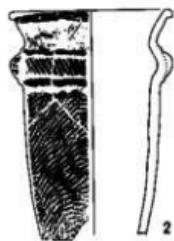
第34図 第6号住居址遺物実測図 1~11(1:3), 12



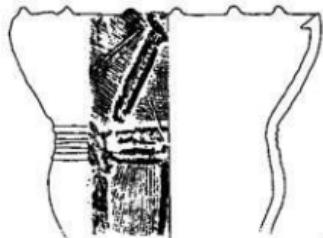
第35図 第6号住居址遺物実測図 13~20(1:6)、21~24(1:3)



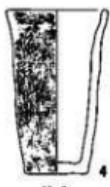
1



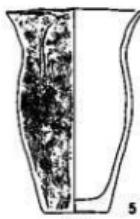
2



3



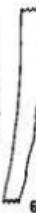
No.3



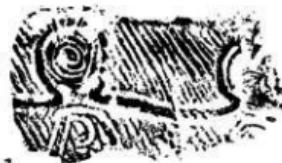
No.2



No.12



No.5



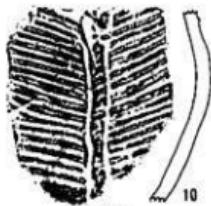
No.4



8

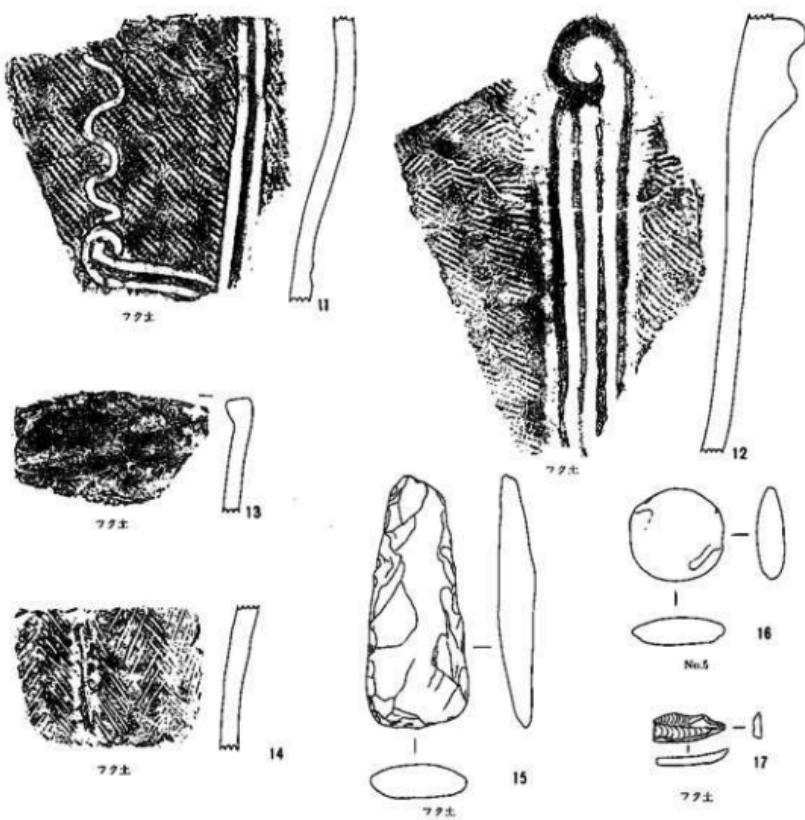


フタ土

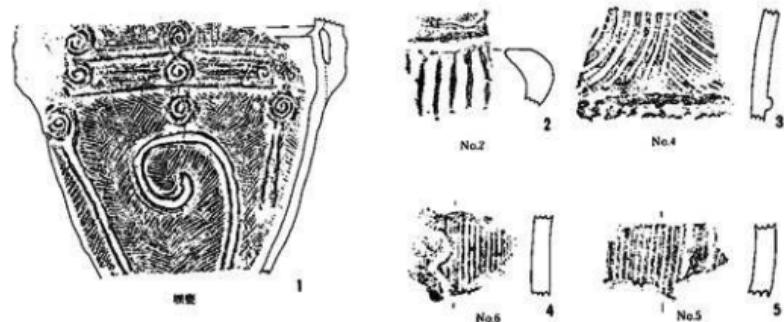


フタ土

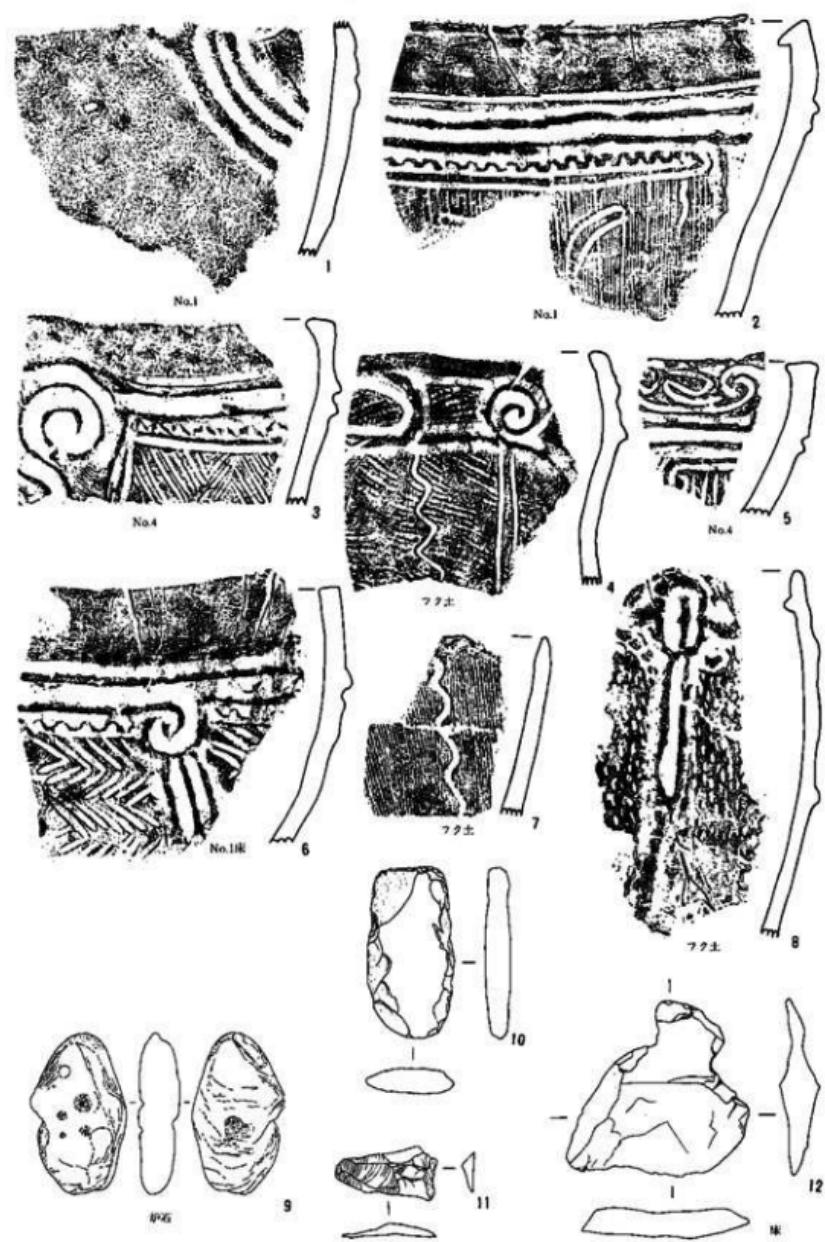
第36図 第7号住居址遺物実測図 1~5(1:6)、6~10(1:3)



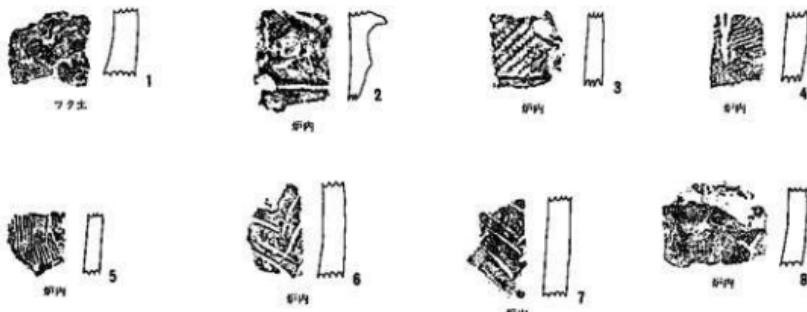
第37図 第7号住居址遺物実測図 11~17(1:3)



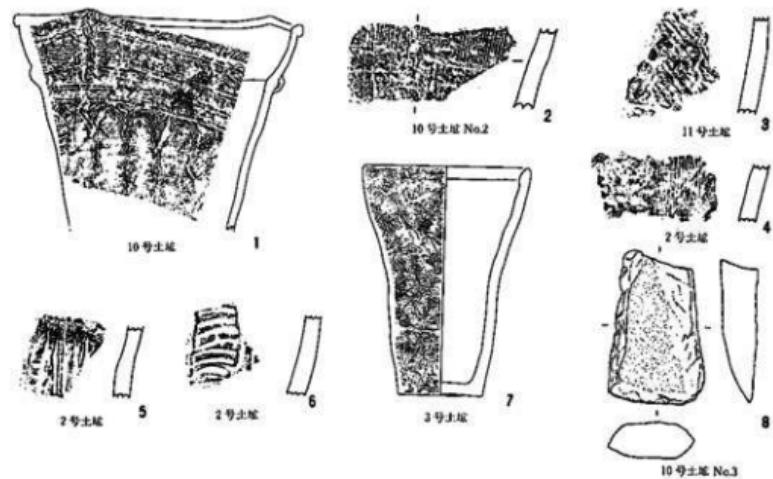
第38図 第8号住居址遺物実測図 1(1:6)、2~5(1:3)



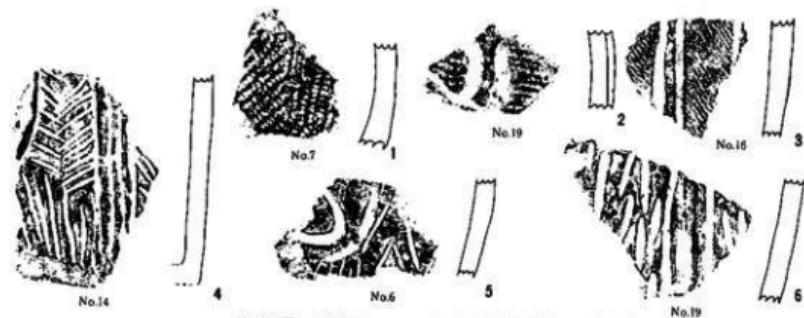
第39図 第9号住居址遺物実測図 1~8(1:3)、9(1:9)、10~12(1:3)



第40図 第12号住居址遺物実測図 1~8(1:3)



第41図 土坑出土遺物実測図 1~8(1:3)



第42図 B地区トレンチ出土土器実測図 1~6(1:3)

ま　と　め

島崎遺跡の発掘調査は、伊那市手良地区県営は場整備事業に伴う埋蔵文化の記録保存による緊急発掘調査である。本報告書は、平成元年度内に刊行する義務があるので、実測図及び図版を主に報告し、考察は後日にゆすることとした。本報告書をまとめるにあたって、調査中に知り得た二、三の問題点について述べ、まとめとしたい。

1. 島崎遺跡は、八ッ手公民館の西に展開する舌状の台地に所在するが、そのうち「字」社宮司地積とを中心に調査が行なわれた。

2. 調査の結果は、縄文時代中期中葉末期の住居1軒と、縄文時代中期後葉I～III期の住居址12軒、土壙16基を調査することができた。土器の分類については、長野県史の分類によった。本遺跡出土土器の様相は、諏訪地方の土器様式の影響をかなり強く受けているように思われる。

3. 本遺跡の集落は、今回調査された地点が南限で、これより北と西に広がる面積約3.6haの範囲に分布しているかなり広い遺跡と考えられる。

4. 本遺跡の調査方法は、区画整理計画に基き地盤が切取り移動する個所のみが調査対象であったので、今後調査された以外の区域の造成にあっては再調査の必要があり得る。

5. B地区の調査においては、竪穴7基が検出されたのみで住居址は発見されなかった。出土遺物の状況からは附近に縄文や平安の遺跡が考えられる地区である。

6. 地質については、A地区は六道原段丘面の北限にあたる古いテフラ面であるが、B地区はA地区と異なり沢川の氾濫源である個所となり、地質柱状図の示す様な結果となった。從って本遺跡は、南側が古い六道原面で、北側は氾濫源という異なる地質構造の遺跡であることが確認された。

7. 「八ッ手」という地名であるが、遺跡の調査中に地元の方々に尋ねてみたが、決定的ないわれは確認できなかった。広辞苑を参考に記してみると、「八つの手があること。」「八ッ手網の略。」「ウコギ科の常緑灌木。暖地に自生し、高さ約2m、葉は大形で質厚く、掌状に七~八中裂し、葉柄は長い。晩秋の頃茎上に花茎を出し、黄白色の五弁の小花を球状につける。果実は球状の液果で、翌年の初夏に熟し、紫黒色となる。庭木として葉は据瘧薬として有効。」「テングノウチワ。」「山の沢が八つある意。」などが考えられている。

8. 遺跡周辺の調査で、八ッ手原の西の山林に径4~5m高さ0.8~1.2m内外の円塚が5基、長径11m高さ1mと径6.5mm高さ1mの双子塚2基の計7基の塚が発見された。この塚に関しては地区の方々もあまり注目していなかったようである。塚の近くには五輪塔と無縫塔が建っていた。この塚にも今後注目してみたい。

9. 八ッ手公民館のある「字」古城地積からは表探であるが灰釉陶器が発見された。この古城地積には平安時代の村が存在していたことを物語っており、今後八ッ手地区の古代末中世史を研究する上で貴重な資料となろう。

あとがき

本報告書は、平成元年度に刊行を義務づけられており調査団長、調査員の先生方はそれぞれ他の激務の仕事があるにもかかわらず、報告書作成に絶大なる御尽力を賜り、感謝に絶えない次第であります。

今回の調査においては、13軒の住居址群等が検出され縄文時代中期後葉を中心とした土器等数多く出土しました。発掘のなかで付近における小字名や、円形塚などを知り得たことは今後の研究に大いに役立つことと思われます。

冬期における現場作業でご苦労をいただいた作業員の皆様、現場説明会等熱心に参加、協力していただいた地元の方々や、円塚調査においてご協力いただいた、登内三郎氏、登内祖一氏、連日の調査でお世話になった藤森文雄氏に心より感謝の意を表します。

本遺跡調査の成果については、今後社会教育の一環としても報告をしていきたいと考えている次第であります。

教育次長 三沢貞一

参考文献

上伊那教育会	「先史及び原始時代の上伊那」	(1926)
上伊那教育会	「上伊那誌」第二巻 歴史編	(1965)
藤森 栄一	「井戸尻遺跡」 中央公論美術出版	(1965)
小林 達雄 他	「日本原始美術 1」	(1977)
岡本 勇	「縄文土器大成 2 中期」	(1981)
長野県史刊行会	「長野県史」考古資料編 全1巻(三)	(1981)
瀬戸市歴史民俗資料館	「研究紀要 I」	(1982)
瀬戸市歴史民俗資料館	「研究紀要 III」	(1982)
高遠町教育委員会	「勝間・堀遺跡発掘報告書」	(1982)
山梨県立考古博物館	「縄文時代の酒造具」有孔鍔付土器展	(1984)
山梨県教育委員会	「山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第17集	
日本道路公団	「駿迎堂 I」	(1986)
伊那市教育委員会	「堤林・島崎遺跡緊急発掘調査報告書」	(1987)
長野県史刊行会	「長野県史」考古資料編 全1巻(四)	(1988)
小林 達雄	「縄文土器大観 2 中期 I」小学館	(1988)
小林 達雄	「縄文土器大観 3 中期 II」小学館	(1988)
日本道路公団名古屋建設局	「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書」	
長野県教育委員会	「塙尻市内その1 上木戸遺跡」	(1988)
伊那市教育委員会	「山の田遺跡緊急発掘調査報告書」	(1988)

図 版



1



2

図版 I 1. A 地区住居址群 2. B 地区遠景



1



2



3

図版 2 1. 島崎遺跡の遠望 2. 明神の森・提林 3. 山ノ田方面



図版3 1. 貴舟神社東の水田地帯 2. 沼田付近から貴舟神社 3. 小御堂付近



1



2



3



4

図版4 1. 松尾神社 2. 貴舟神社 3. 神明社の森 4. 小屋の社殿



図版 5 1. 小屋・古城 2. 古城の堀と八手川 3. 宗明寺跡



1



2

图版 6 1. 第 1 号住居址 2. 第 2 号住居址



1



2

图版 7 1. 第3号住居址 2. 第4号住居址



1



2

图版 8 1. 第 5 号住居址 2. 第 6 号住居址

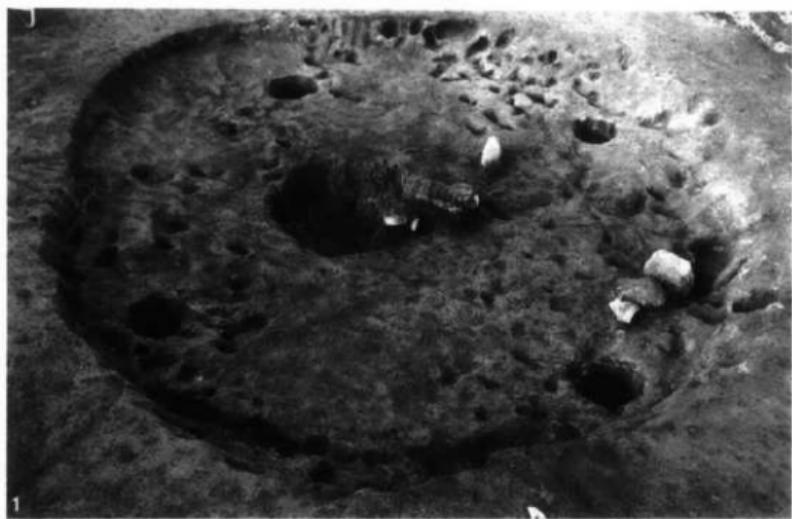


1



2

图版 9 1. 第 7 号住居址 2. 第 8 号住居址



1

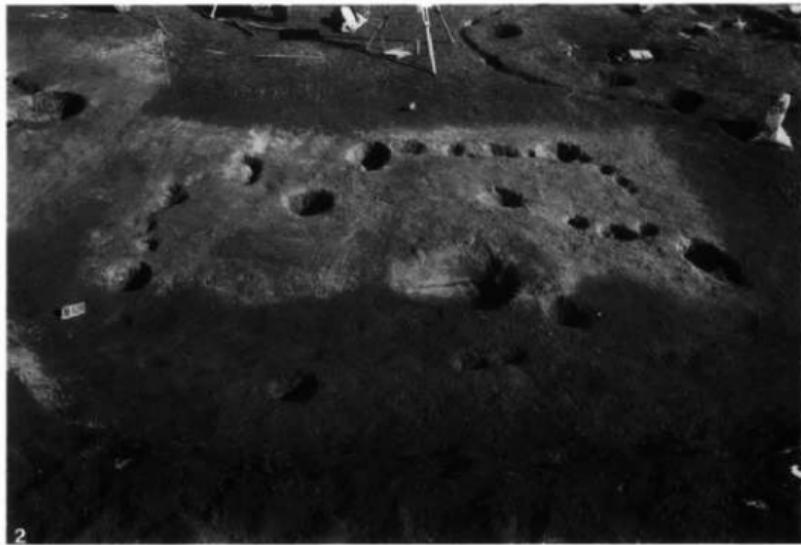


2

图版10 1. 第9号住居址 2. 第10号住居址



1



2

图版II 1. 第11号住居址 2. 第12号住居址

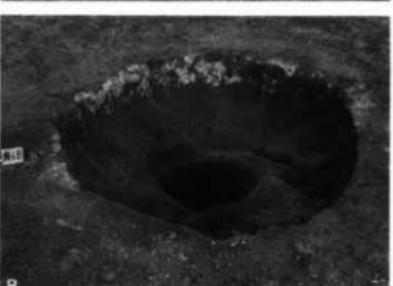
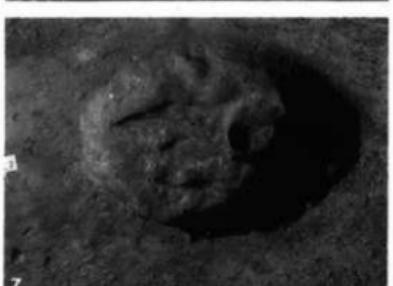
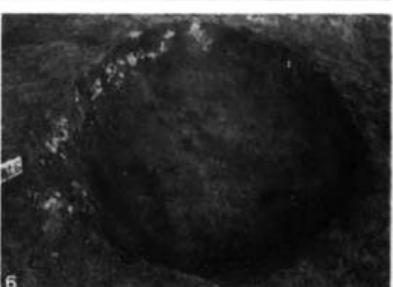
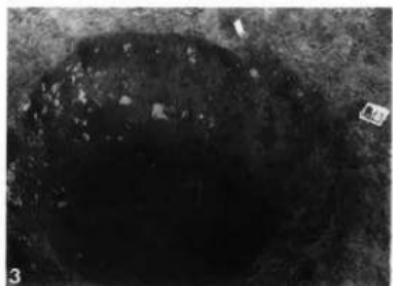


1

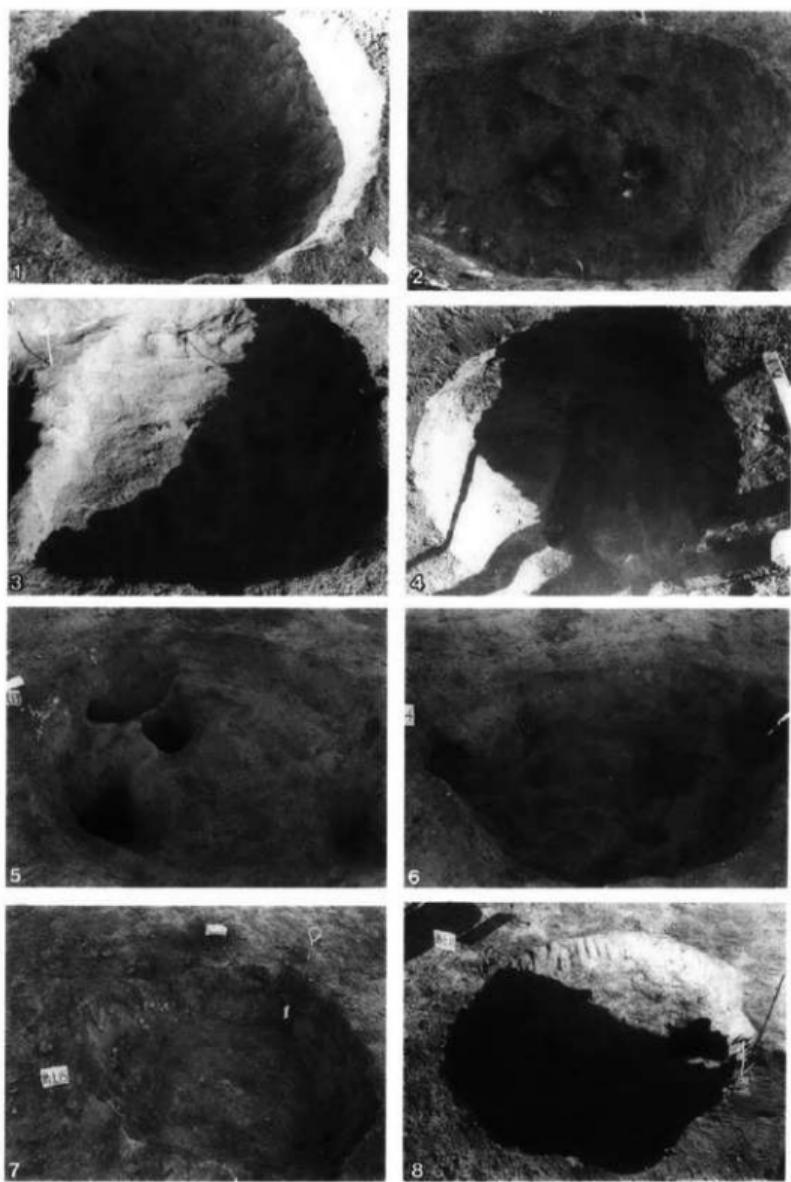


2

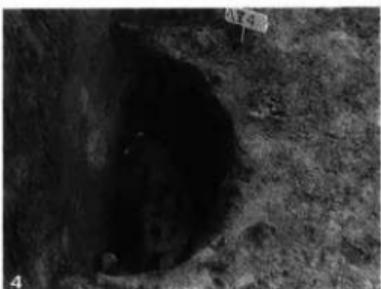
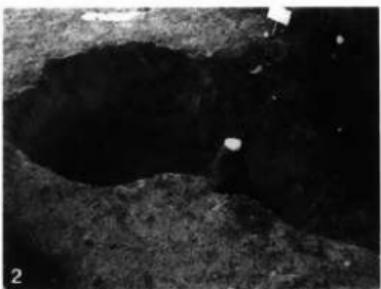
图版12 1. 第13号住居址 2. 第5号住居址出土石器



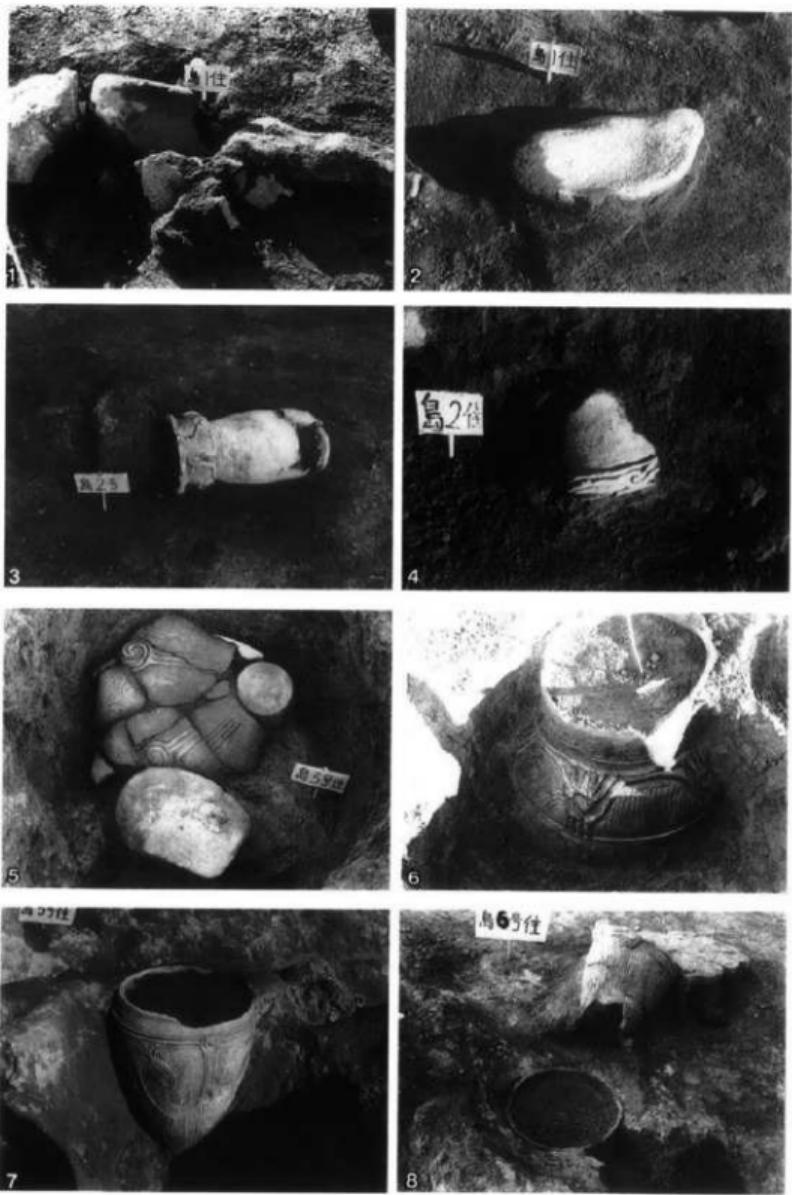
图版13 1. 1号土坑 2. 2号土坑 3. 3号土坑 4. 4号土坑 5. 5号土坑 6. 6号土坑
7. 7号土坑 8. 8号土坑



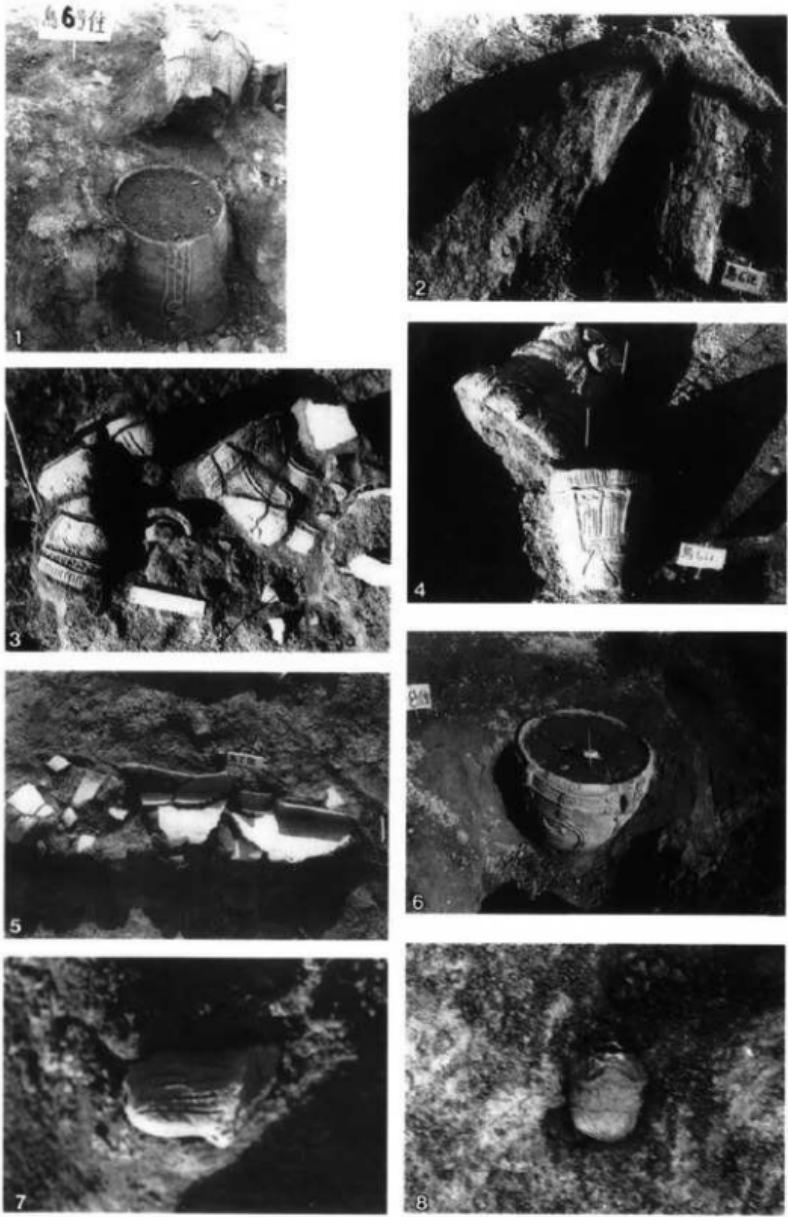
图版14 1. 9号土块 2. 10号土块 3. 11号土块 4. 12号土块 5. 13号土块 6. 14号土块
7. 15号土块 8. 16号土块



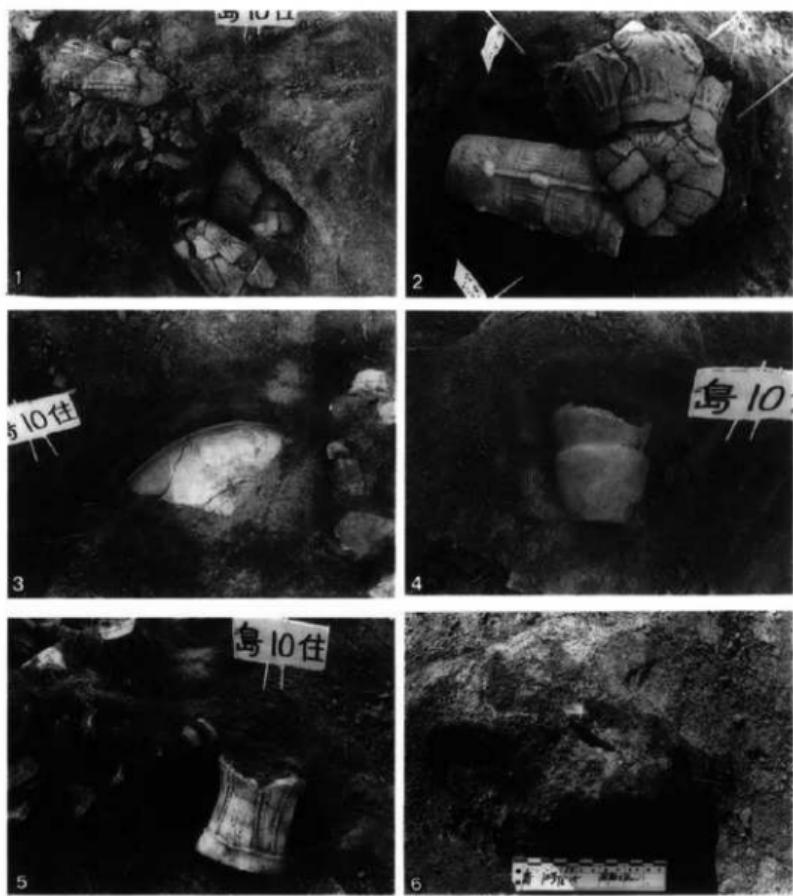
图版15 1. 1号竖穴 2. 2号竖穴 3. 3号竖穴 4. 4号竖穴 5. 5号竖穴 6. 6号竖穴
7. 7号竖穴



図版16 住居址遺物出土状況 1・2、1号住 3・4、2号住 5、3号住 6、3号住埋甕 7、5号住埋甕 8、6号埋甕



図版17 1. 6号住埋甕 2. 6号住木炭 3. 6号住 4. 6号住 5. 7号住 6. 8号住埋甕
7. 1号住土偶 8. 3号住炉内ミニチュア土器



図版18 1~6. 第10号住居址遺物出土状況



图版19 住居址出土遗物 1·2. 第1号住居址 3. 第2号住居址 4·5. 第3号住居址



图版20 1. 第4号住居址 2·3. 第6号住居址



1



2



3



4

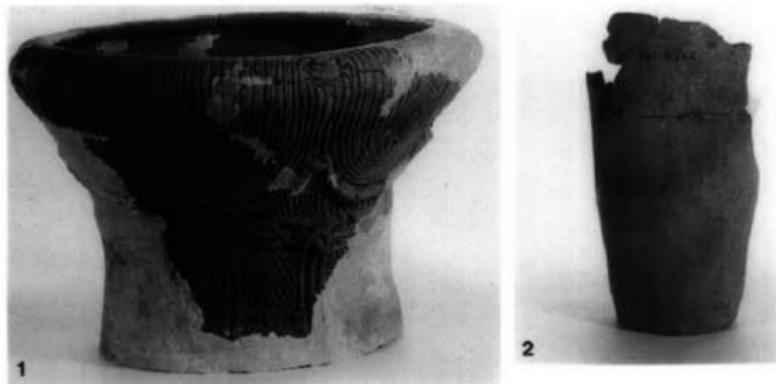


5



6

图版21 1. 第5号住居址 2·3. 第6号住居址埋甕 4·5. 第6号住居址 6. 第7号住居址



图版22 1~3, 第7号住居址 4, 第8号住居址埋甕 5, 第11号住居址



1



2



3



4



5



6

图版23 1~6. 第10号住居址出土遗物



1



2



3



4



5



6



7

图版24 1~7. 第10号住居址出土遗物



1



2

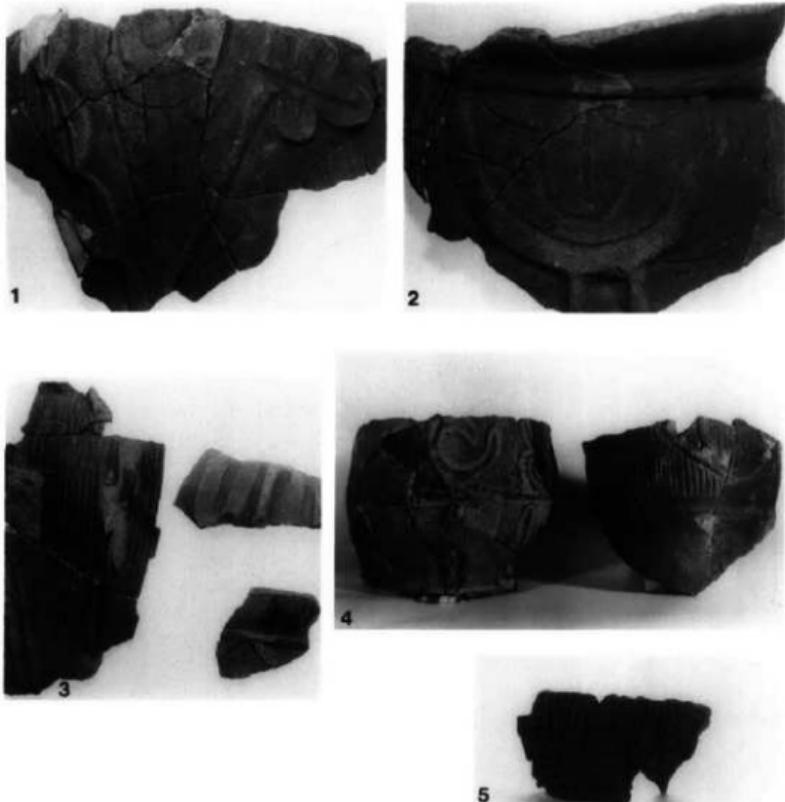


3

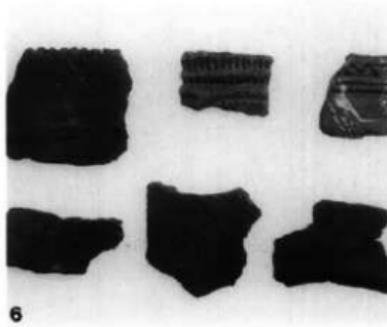
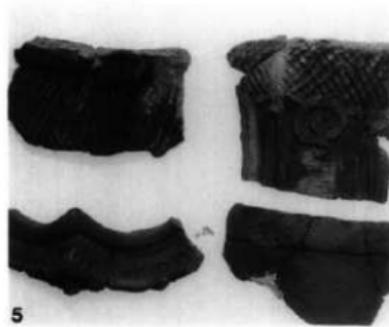
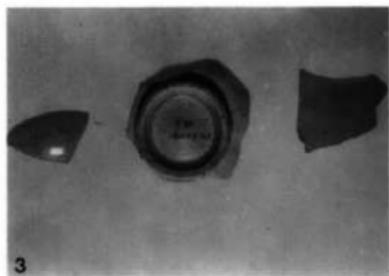
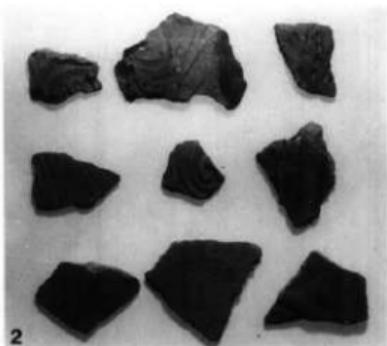


4

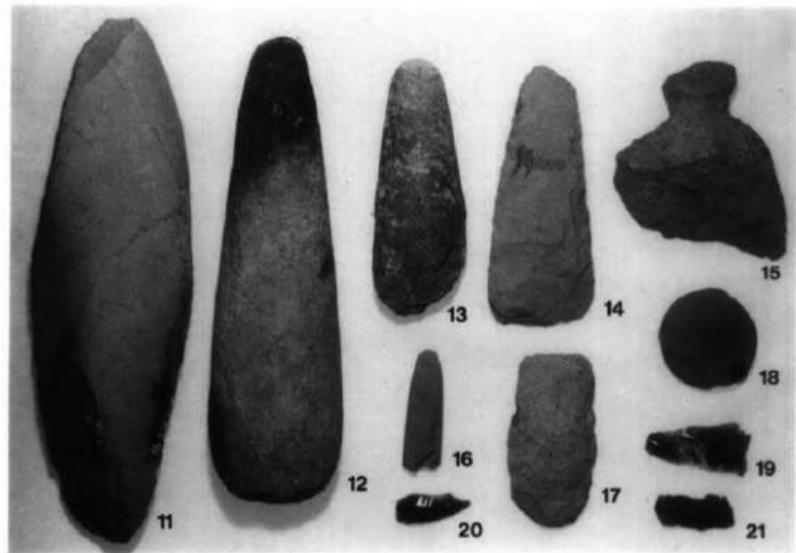
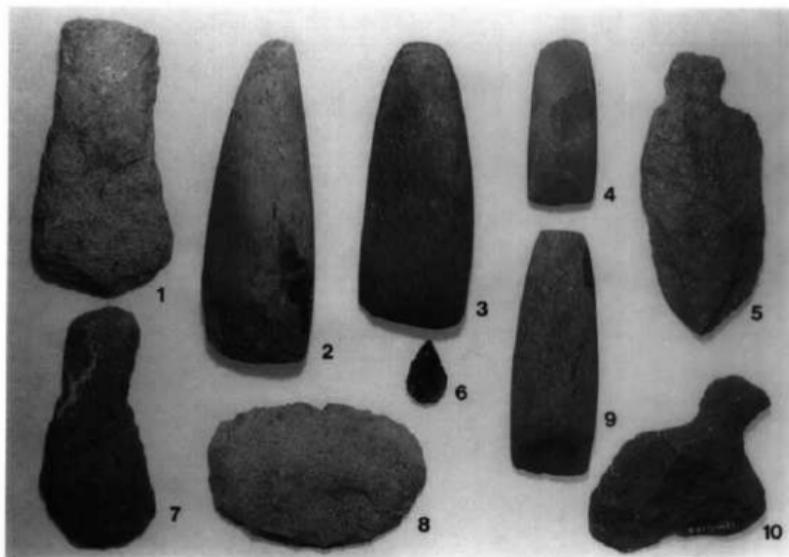
图版25 1~4. 第10号住居址出土遗物



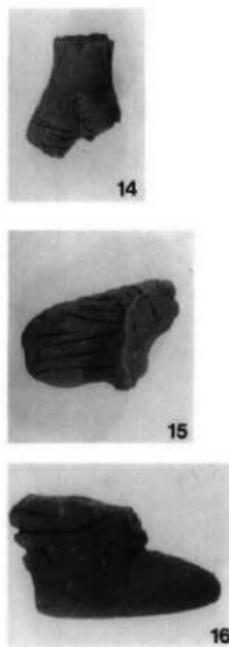
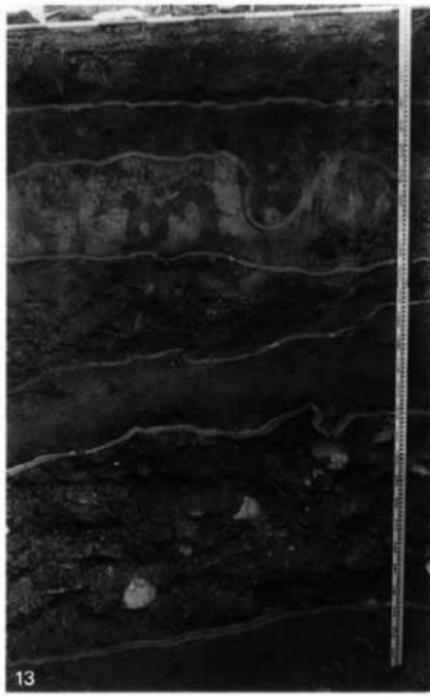
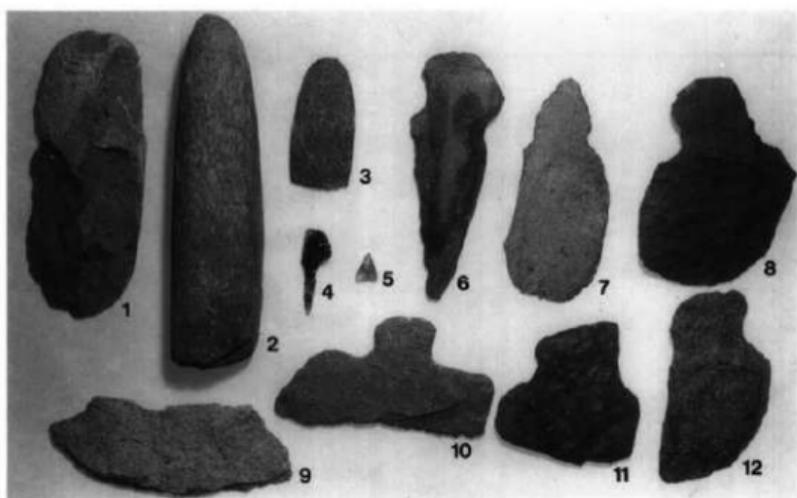
図版26 1～5、第10号住居址出土遺物 6、第10号住居址出土遺物セット



図版27 1・2, B地区トレンチ 3, B地区出土陶器 4, 土塙出土土器 5, 10号土塙
6, 11号土塙



图版28 1. 2住 2. 2住 3. 3住 4. 2住 5. 3住 6. 1住 7. 4住 8. 1住 9. 1住
10. 1住 11. 5住 12. 6住 13. 5住 14. 7住 15. 7住 16. 6住 17. 9住
18. 9住 19. 9住 20. 7住 21. 5住



図版29 1～12、第10号住居址出土石器 13、地層調査グリッド 14、10号住 15、1号住 16、5号住



1



2

図版30 1. 発掘調査に参加した方々 2. 遺跡説明会風景

島崎遺跡

—緊急発掘調査報告書—

平成2年3月 発行

発行 上伊那地方事務所
長野県伊那市教育委員会

印刷 小松総合印刷所
